

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成16・17・18年度発掘調査報告

蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(Ⅱ)

はじめに

蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群の発掘調査は、平成16年度から平成18年度にかけて実施した。調査の経過と全体の概要については、昨年度に刊行した『京都府遺跡調査報告集』第129冊で報告したので、参照願いたい。^(注1)

今回の調査では、縄文時代から中世末期までの各時期の遺構・遺物を検出した。整理作業に際しては、保存処理作業の急がれる鉄製品が多数出土した国分古墳群の整理作業を優先して実施したため、昨年度は、D1～D5、D8、D10の各地区、75・76、80・81の各トレンチについて報告を行った。

今年度はA1～A6、B1～B6、C1～C9、D6・D7・D9の各地区と、昨年度報告を行わなかった水路部分の調査トレンチの報告を行う。ただし、B2地区は削平が顕著で、トレンチ壁面の観察で土坑状の落ち込みを確認したのみで、遺物も出土しなかった。したがって、B2地区は特に一項を設けることはしなかった。本報告で用いた国土座標系は、世界測地系を使用している。また、遺構の方位はいずれも座標北からの角度で示している。

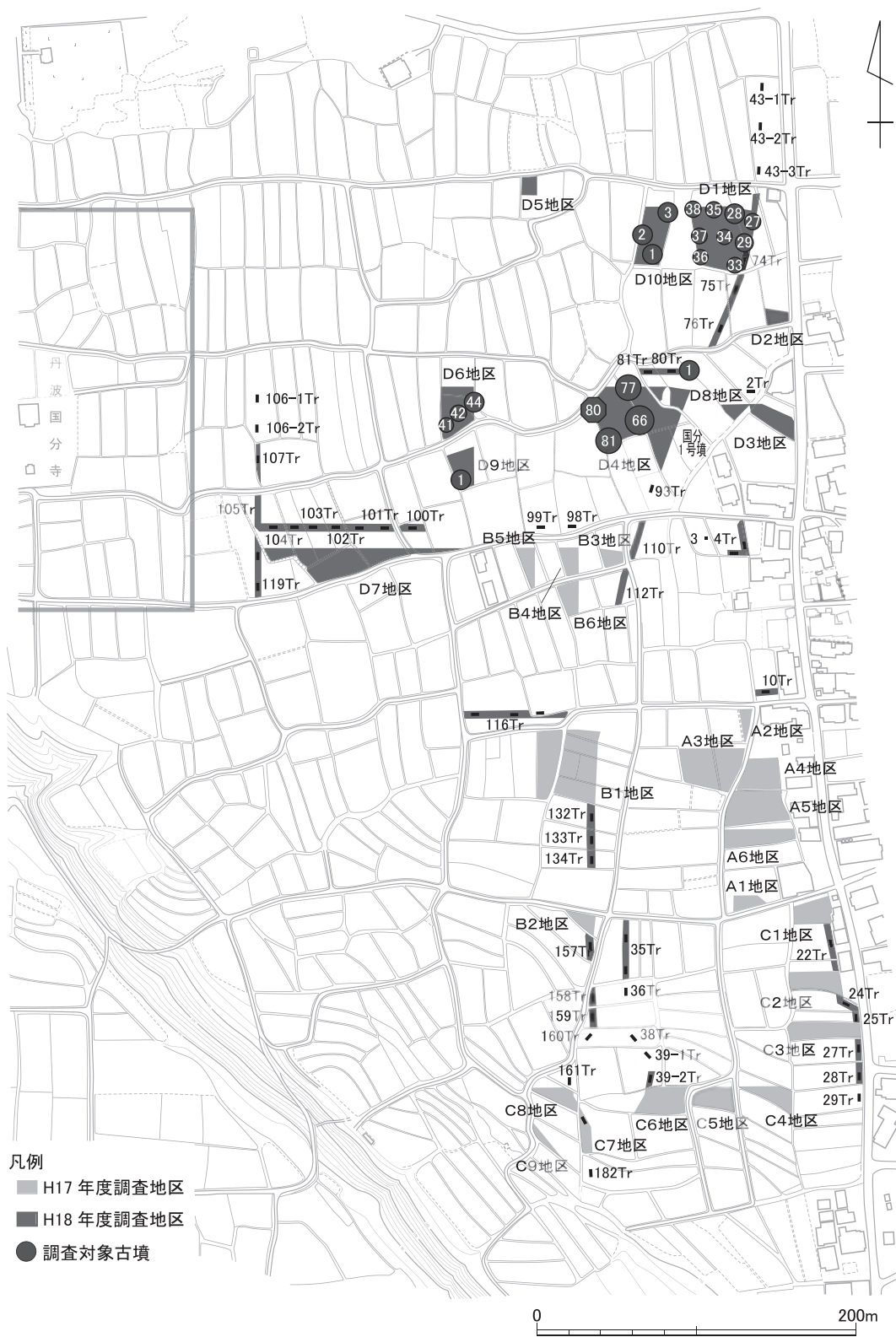
本報告の執筆は、当調査研究センター調査第2課調査第1係調査員石崎善久、調査第2係専門調査員黒坪一樹・岡崎研一、調査第3係次席総括調査員伊野近富、同主任調査員森島康雄、同調査員筒井崇史・村田和弘・松尾史子がそれぞれ分担した。文責については各項の末尾に記した。また、本報告に掲載した写真のうち、遺構は各調査担当者が、遺物は調査第1課資料係主任調査員田中彰が撮影した。

なお、本年度は、現地での発掘調査はすべて終了したことから、報告書作成に伴う整理作業のみを実施した。報告書作成に係る経費は全額、近畿農政局が負担した。

(筒井崇史)



第1図 調査地位位置図 (1/50,000 京都西北部)



第2図 蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群調査区配置図 (1/4,000)

検出遺構と出土遺物

今回の報告は、既報告分に引き続くものであるから、以下の項番号は『京都府遺跡調査報告集』第129冊に続くものとする。ご了承願いたい。

8. D6地区の調査

調査事例の少ない八角形墳(国分45号墳)を検出したD4地区の西約80mに設定した調査区である。遺構面は2面確認し、上層では平安時代ないし中世の遺構を検出した。また、古墳に伴う横穴式石室を確認していたが、墳丘そのものは堆積土で埋没していたため、一部、重機を利用しな



第3図 D6地区検出遺構配置図(1/200)

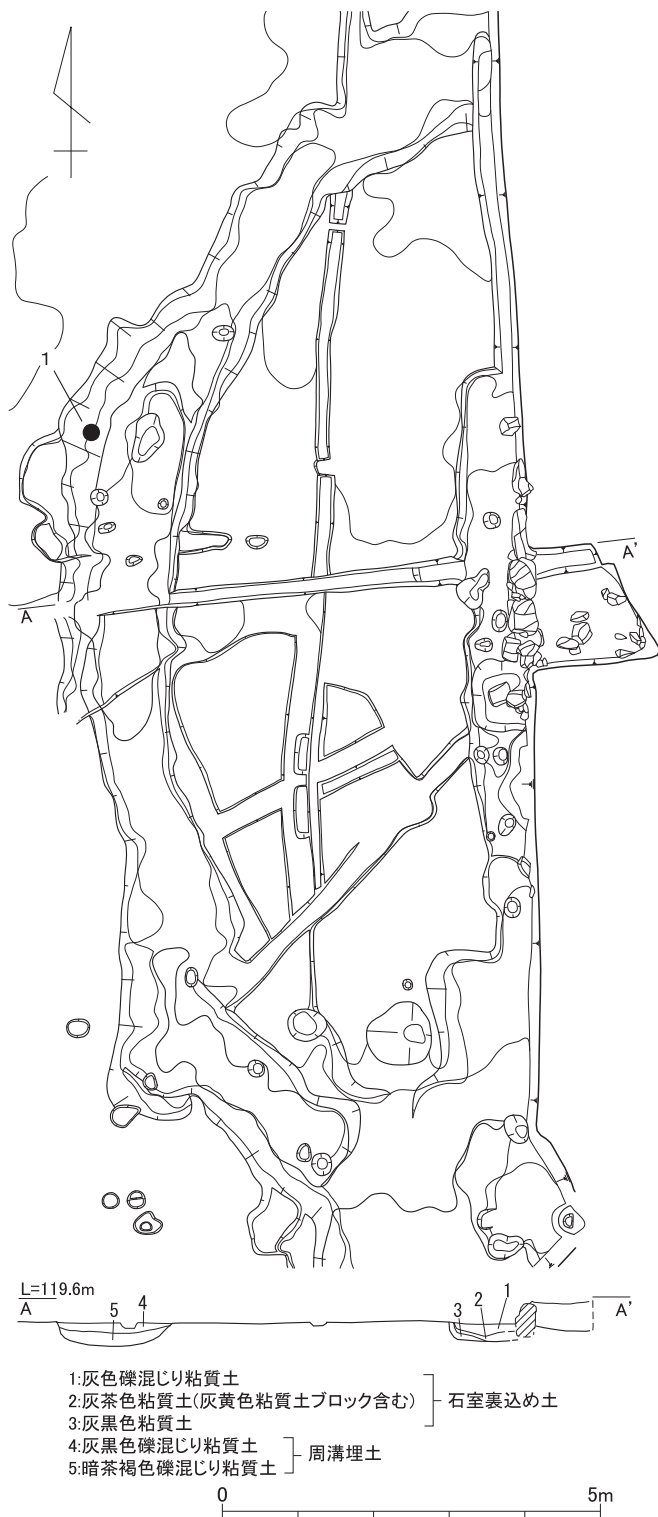
がら、墳丘の検出に努めた。下層遺構として古墳を3基検出した(第3図)。

(1) 古墳時代の遺構・遺物

横穴式石室を内部主体とする古墳を3基検出した。

① 国分53号墳

位置 調査区の東辺中央付近で検出した。調査区東壁と石室の右側壁がほぼ一致して検出され



第4図 国分53号墳墳丘測量図および土層断面図

た。したがって、墳丘の東半部については調査区外に位置する。なお、石室床面の標高は約119.1mである。

墳丘(第4図) 墳丘のおおよそ西半部を検出した。墳丘は大きく削平されており、石室を構成していた石材も1石分が残存する程度である。墳丘の周囲を幅1.2~1.8m、深さ20~35cmの周溝が弧状にめぐる。周溝の南端は石室の前庭部へとつながる。前庭部も西半部を検出したのみであるが、「ハ」字状に開く。周溝から復原できる国分53号墳の規模は、直径14~15m程度の円墳である。

石室 調査区の東壁にほぼ一致して横穴式石室の右側壁を検出した。この石室については、造成部分の設計を一部変更の上、現地で保存されることになったため、石室内部を部分的に調査したに留まる。奥壁が未確認であるが、前庭部の存在や石室掘形の形状から、ほぼ南に開口する横穴式石室と考えられる。

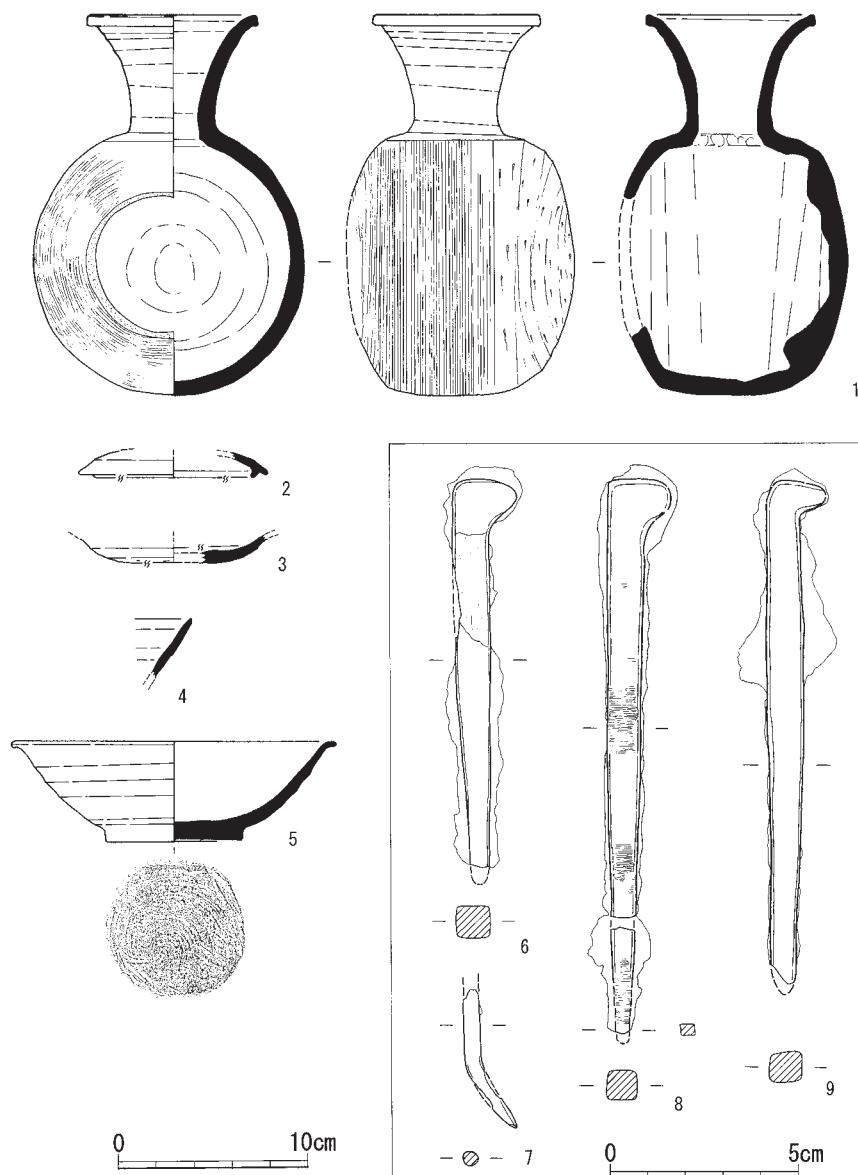
石室は基底の1石が残存する程度で、検出した右側壁も中央部から南側の石材は抜き取られていた。奥壁は調査区外に位置するため、詳細は不明である。

石室の規模は全長3m以上、幅1m以上を測る。石室の主軸はおおむね

南北方向である。石室掘形は奥壁側の北西角を検出しており、全長7.8m、深さ20cm前後を測る。

遺物出土状況 国分53号墳に伴う遺物としては、周溝北西部の斜面にほぼ接して須恵器提瓶(1)が出土した。前庭部からは須恵器片(2・3)が出土した。石室内の副葬品が掻き出されたものと考えられる。石室内を部分的に掘削している際にも須恵器片(4)が出土した。

一方、石室の内部を部分的に調査したところ、平安時代の須恵器碗1点と鉄釘4点(第5



第5図 国分53号墳出土遺物実測図

図5～9)。5は口縁部を上に向けた状態で出土した。6～9は5の周囲から出土した。なお、8は垂直方向に立った状態で、9は水平の状態で出土した。

出土遺物(第5図) 国分53号墳に伴う遺物として須恵器4点がある(1～4)。また、石室を平安時代に再利用した際の遺物として須恵器1点、鉄製品4点がある(5～9)。

1は周溝から出土した。須恵器提瓶と考えられるが、口縁部の形態が、やや長く延びて外反している。なお、体部の閉塞に用いた粘土板は剝離し失われている。2～4は須恵器杯^(注2)Hや杯G蓋などの小破片である。2・3が国分53号墳の築造時期ないし追葬時期を示すと考えられる。2・3は飛鳥時代前半に位置づけられる。^(注3)

5は石室の再利用に伴う須恵器碗である。糸切り痕を残す底部から、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。平安時代中期のものと考えられる。6～9は5とともに出土した鉄釘である。断面形が方形を呈する大型の鉄釘で、石室の再利用の際に埋納された木櫃など

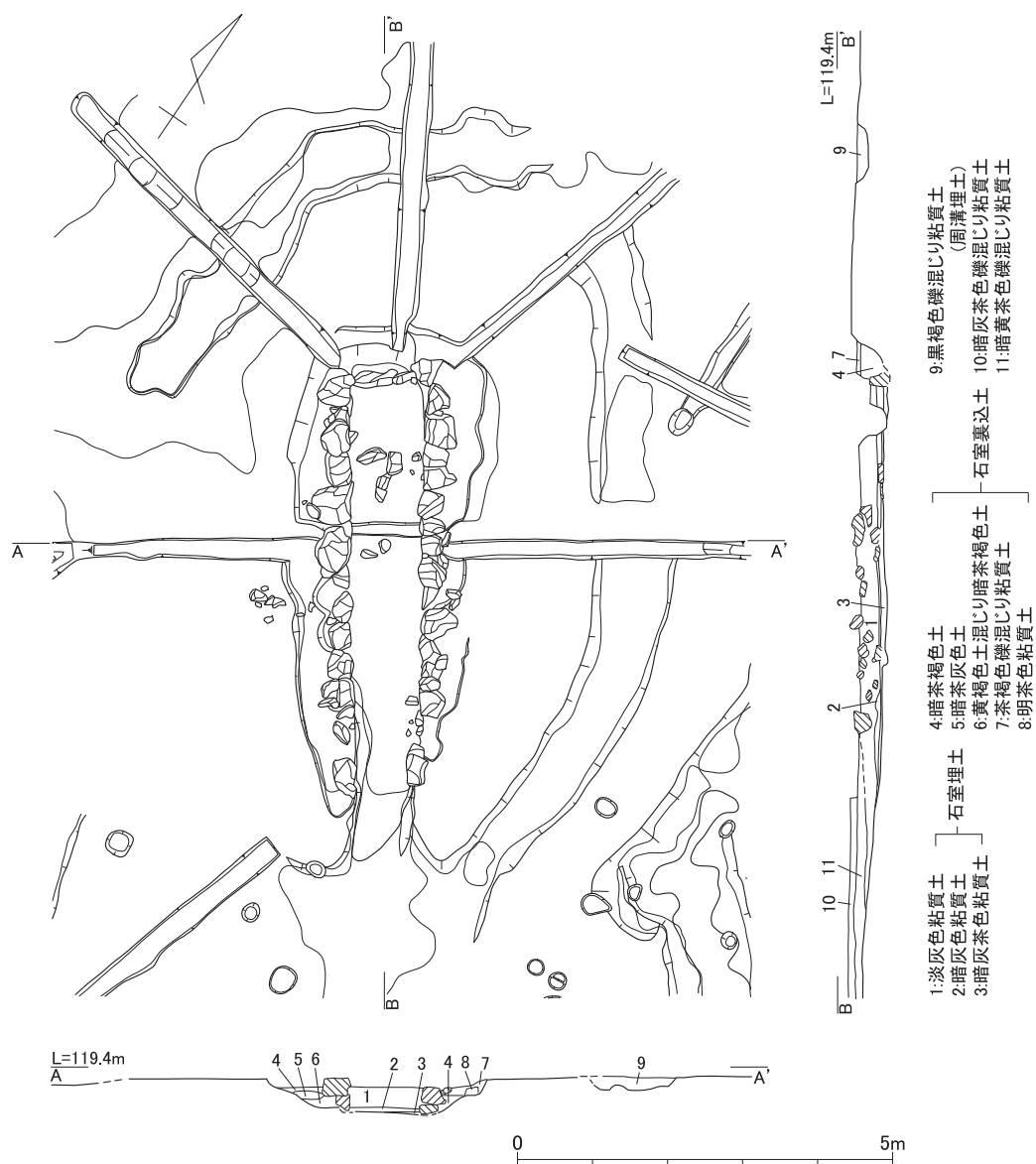
に使用されていたものであろう。

②国分54号墳

位置 国分53号墳の南西側にほぼ接して築造された古墳である。石室床面の標高は約118.8mである。

墳丘(第6図) 墳丘は上半部が大きく削平を受けていたが、古墳の周溝を検出した。周溝は幅0.7～1.0m、深さ15cm前後を測り、古墳の北西側から南東側にかけて残存する。周溝は石室前庭部へとつながる。なお、南西側の周溝は検出されなかった。ほぼ接して国分55号墳が存在するため、55号墳の築造に伴って削平された可能性もある。ただし、石室内出土遺物からは時期差は認めにくい。周溝から復原できる古墳の平面形は石室の主軸方向に長い、楕円形を呈する。墳丘の規模は長軸10.5m、短軸7.7mを測る。

石室(第7図) おおむね南東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。上半部が削平されて



第6図 国分54号墳墳丘測量図および土層断面図

いるものの、基底石と部分的に2石目が残存していた。

奥壁は石材2石を横位に置いて構成している。

両側壁とも石材を横位に用いて壁面を構成している。石材の積み方はやや乱雑である。左側壁では奥壁から約3.3m付近にやや大型の石材が使用されている。袖部を意識していると考えられるが、右側壁には同様の石材はみられない。この大型石材よりも羨道側の石材は両側壁とも、石材を掘形の底面から若干浮いたような状態で検出した。

石室床面には敷石等の施設はなく、若干乱れているものの、棺台と思われる石材を検出した。

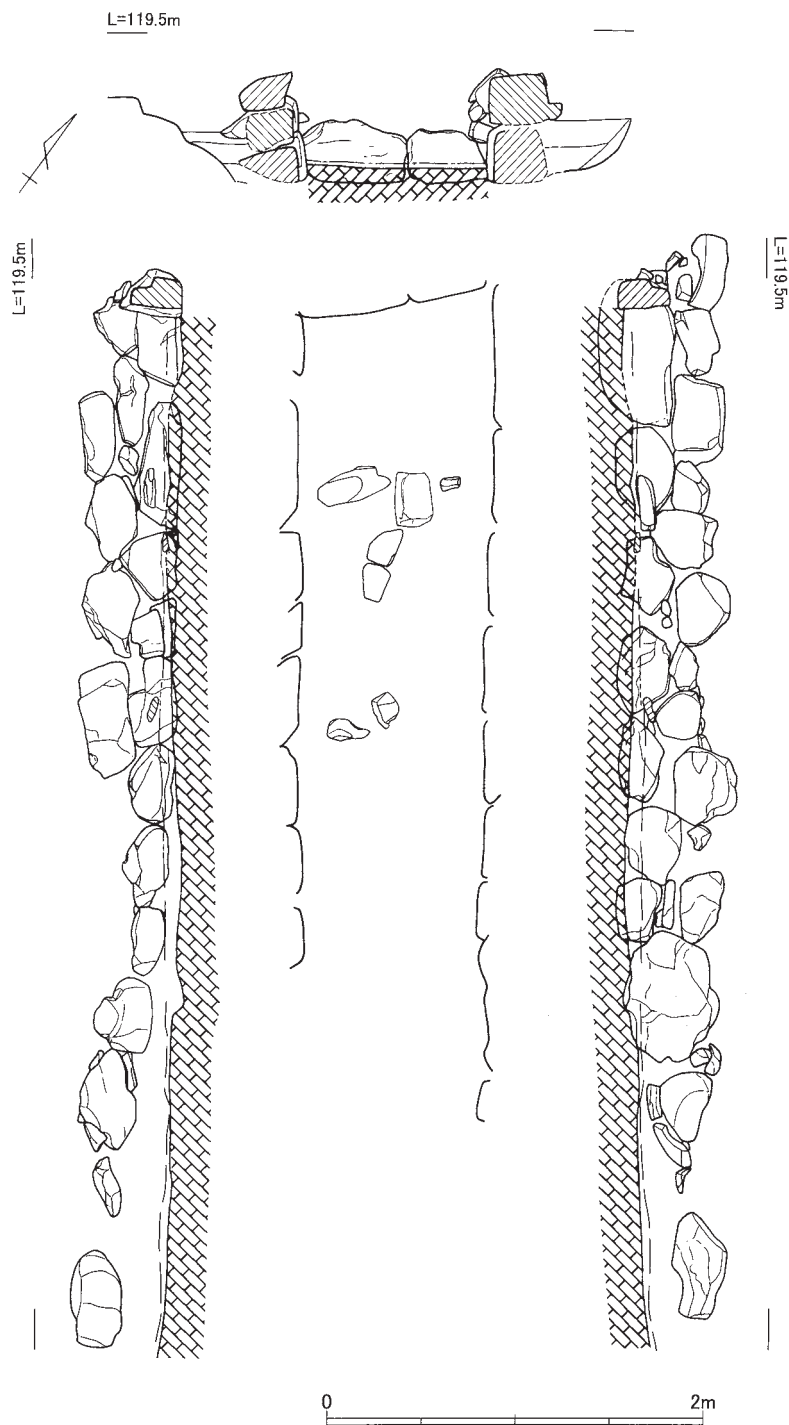
石室の規模は全長5.4m、奥壁付近の幅0.95mを測る。石室の主軸は北に対して約35°西に振る。

遺物出土状況(第8図)

遺物はほぼ石室床面上で出土した。出土位置は大きく3か所に分かれ、奥壁寄

りでは土師器杯(4)が出土した。石室中央部近では須恵器杯H蓋(1・2)、須恵器杯H(3)、耳環2点(7・8)が出土した。このほか羨道付近の埋土から須恵器甕(5)や土師器皿(6)の破片が出土した。

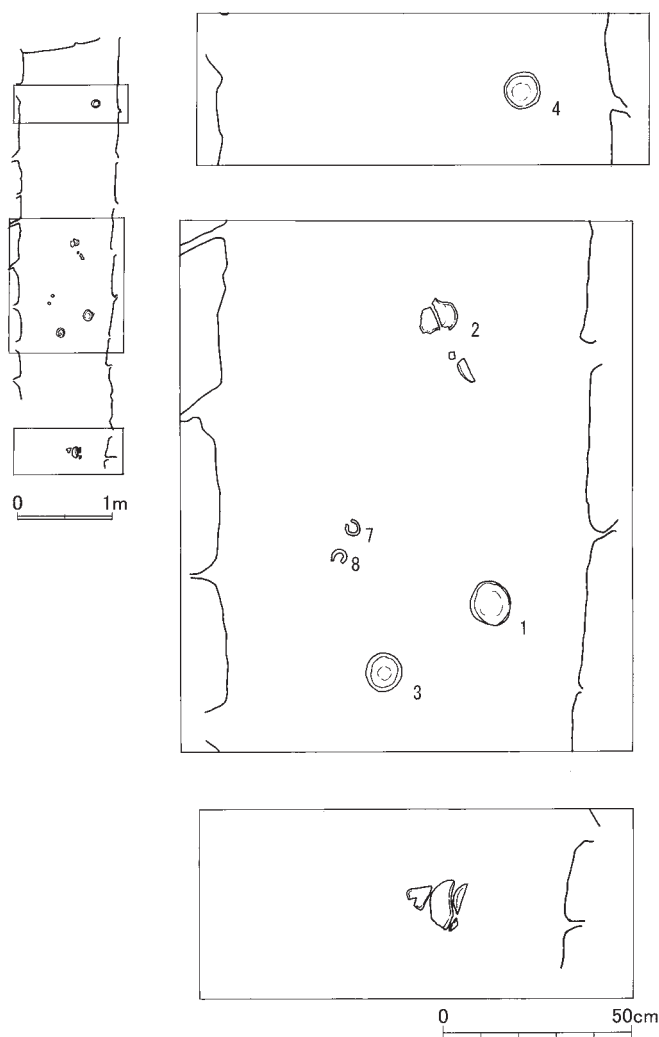
出土遺物(第9図) 国分54号墳に伴う遺物として須恵器4点・土師器2点・耳環2点がある。1・2は須恵器杯H蓋である。天井部に回転ヘラケズリ調整を施さない。3は須恵器杯Hである。底部はヘラキリ後不調整である。5は須恵器甕である。4は土師器杯である。椀状を呈する。6は



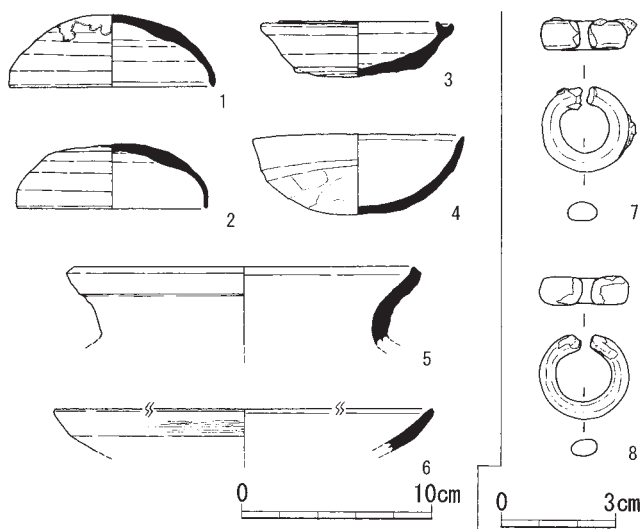
第7図 国分54号墳横穴式石室実測図

土師器皿の破片である。7・8は金銅製耳環である。1～4は飛鳥時代中頃に位置づけられる。

③国分55号墳



第8図 国分54号墳遺物出土状況図



第9図 国分54号墳出土遺物実測図

位置 国分54号墳の南西側にほぼ接して築造されている。石室床面の標高は約118.8mである。

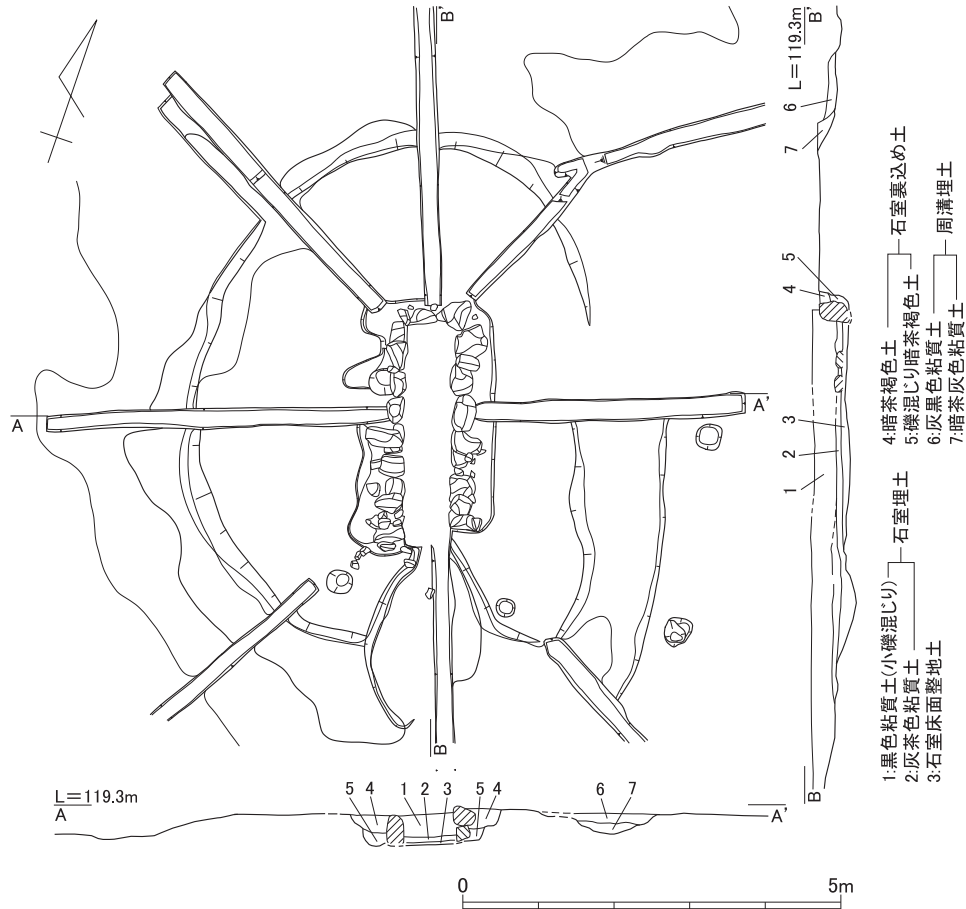
墳丘 (第10図) 墳丘は国分53・54号墳と同様に、上半部が大きく削平を受けていた。古墳の周溝は南東部でのみ検出した。周溝は幅1.0～1.2m、深さ30cm前後を測る。周溝は石室の前庭部へとつながる。周溝から復原できる古墳の平面形は石室の主軸方向にやや長い、楕円形を呈する。墳丘の規模は長軸7.0m、短軸6.5mを測る。

石室 (第11図左) 国分55号墳の石室はおおむね南南東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。上半部が削平されているものの、右側壁では基底石が、左側壁では基底石と部分的に2石目が残存していた。

奥壁は石材2石を用いて構成されている。

右側壁は奥壁から1.3m付近まで石材を立位に用いており、それよりも羨道側では横位に用いる。左側壁は石材をおおむね横位に用いて壁面を構成している。石材の積み方はやや乱雑である。右側壁では奥壁から1.3mのところでは石材の用い方が変化するので、袖部を意識していると考えられる。ただし、左側壁にはこのような徴候はない。

石室床面には敷石等はなく、また棺台と思われるような石材も検出し



第10図 国分55号墳墳丘測量図および土層断面図

なかった。

石室の規模は全長3.0m、奥壁付近の幅0.7mを測る。石室の主軸は北に対して約21°西に振る。

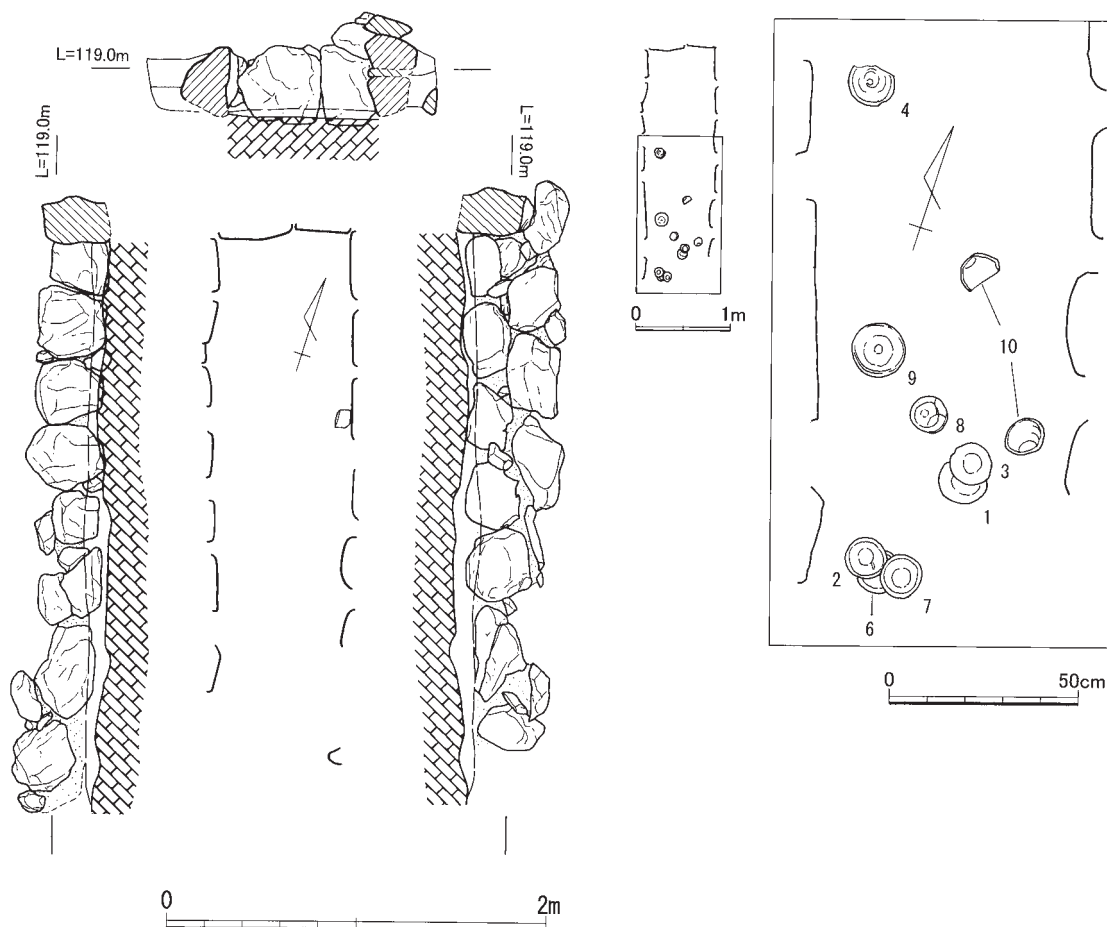
遺物出土状況(第11図右) 小規模な石室であるが、副葬されていた土器の点数が多い。遺物は石室中央部から石室入り口付近にかけてまとまって出土した。

出土遺物(第12図) 国分55号墳に伴う遺物として須恵器10点がある。2以外は完形である。1は杯H蓋、2～7は杯Hである。いずれも天井部ないし底部はヘラキリ後不調整もしくはナデ調整である。8は焼け歪みが著しいが、杯Gと考えられる。3・8は底部外面にヘラ記号が認められる。9はやや大型の碗で、若干焼け歪む。10も碗と考えられるが、あまり例を見ない器形である。口縁部にヨコナデ調整を施す。外面は縦方向にヘラケズリ調整を施す。全体に焼け歪みが著しい。1～8は飛鳥時代中頃に位置づけられる。

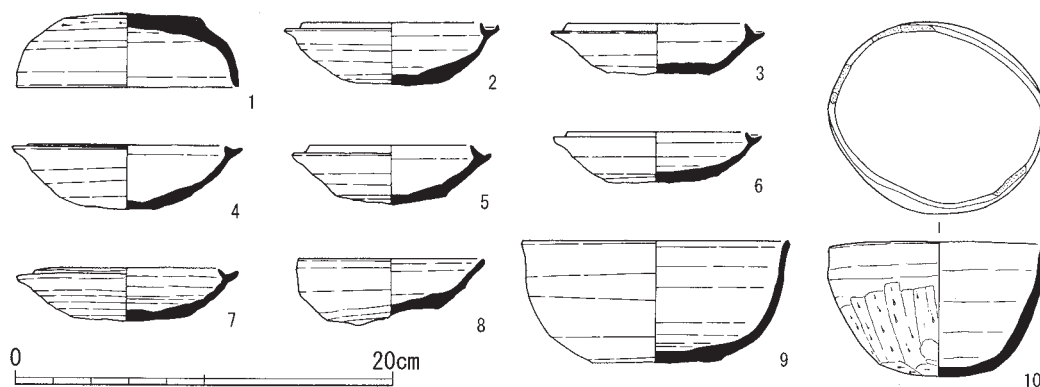
(2) 平安時代・中世の遺構・遺物

①掘立柱建物跡S B01(第13図上) 調査区の北西部で検出した。桁行4間以上(約8.5m以上)、梁行2間(約6.0～6.5m)の総柱の建物である。柱筋や柱間はやや不揃いである。建物の方位は北に対して約3°西に振る。柱穴はおおむね直径20～30cm、深さ25～50cmを測る。

各柱穴から小片であるが、遺物が出土した(第14図5～12)。5は柱穴S P13から出土した土師器皿である。6・7は柱穴S P19から出土した土師器碗の底部で、6は高台を持つ。7は底部外



第11図 国分55号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図

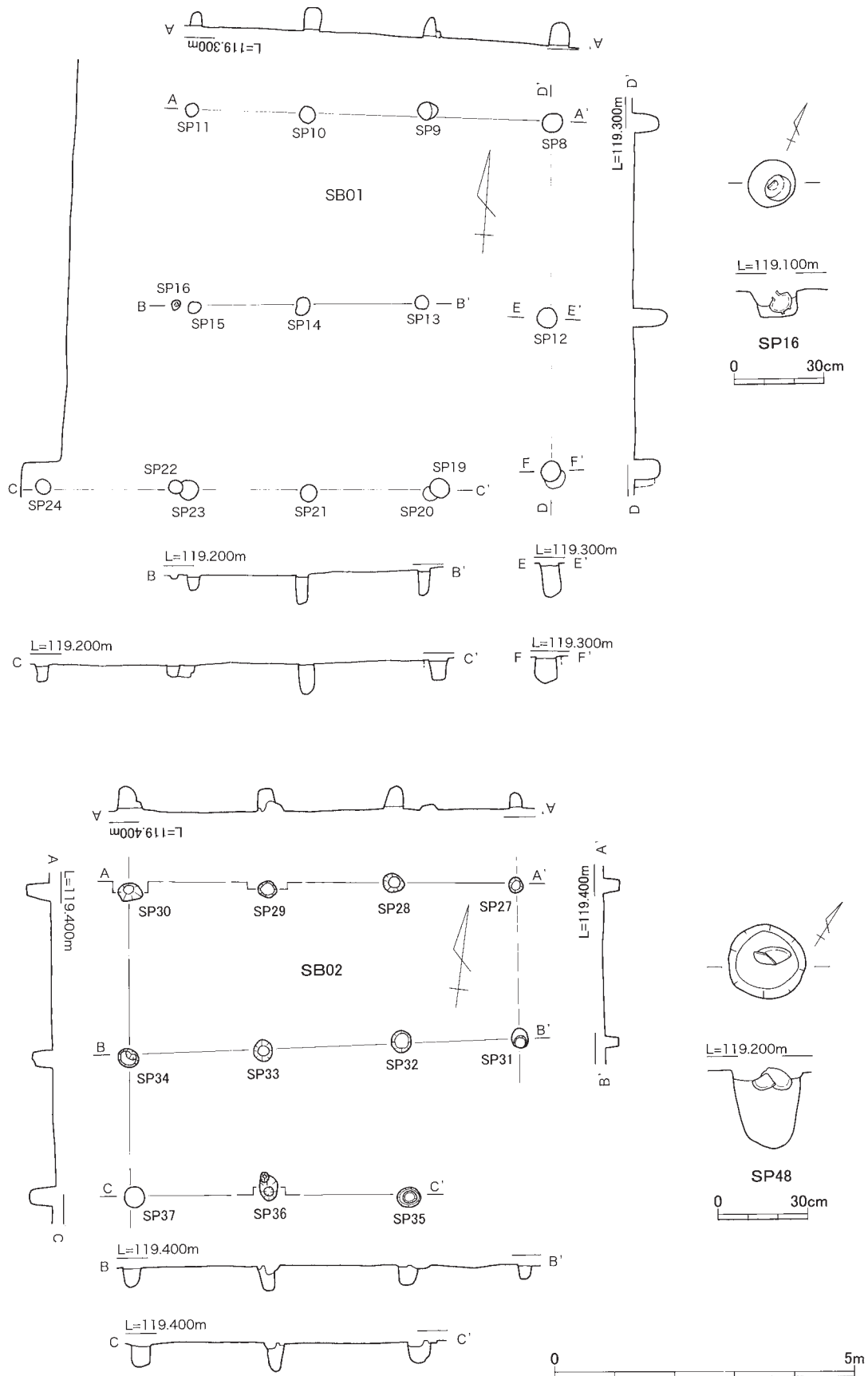


第12図 国分55号墳出土遺物実測図

面に糸切り痕がみられる。8・9は柱穴S P14から出土した瓦器碗である。10も柱穴S P14から出土した土師器の杯または皿の破片である。11は柱穴S P21から出土した瓦器碗である。12は柱穴S P9から出土した土師器の小皿である。

②掘立柱建物跡S B02(第13図下) 調査区の南西部で検出した。桁行3間(約6.5m)、梁行2間(約5.2m)の総柱の建物である。柱筋や柱間はやや不揃いである。建物の方角は北に対して約3°30′西に振る。柱穴はおおむね直径30cm前後、深さ25~40cmを測る。

遺物は少量出土した(第14図4・13)。4は柱穴S P36から出土した「て」字状口縁を呈する土



第13図 掘立柱建物跡S B 01・02実測図

師器皿である。13は柱穴S P 28から出土した土師器の羽釜である。

③その他の柱穴 上記の掘立柱建物跡以外にも若干の柱穴を検出し、遺物も少量出土した。第14図1は柱穴S P 16から出土した小型の須恵器長頸壺で、口縁部を欠損する。第14図2・3は柱穴S P 48から出土した土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁を呈する。

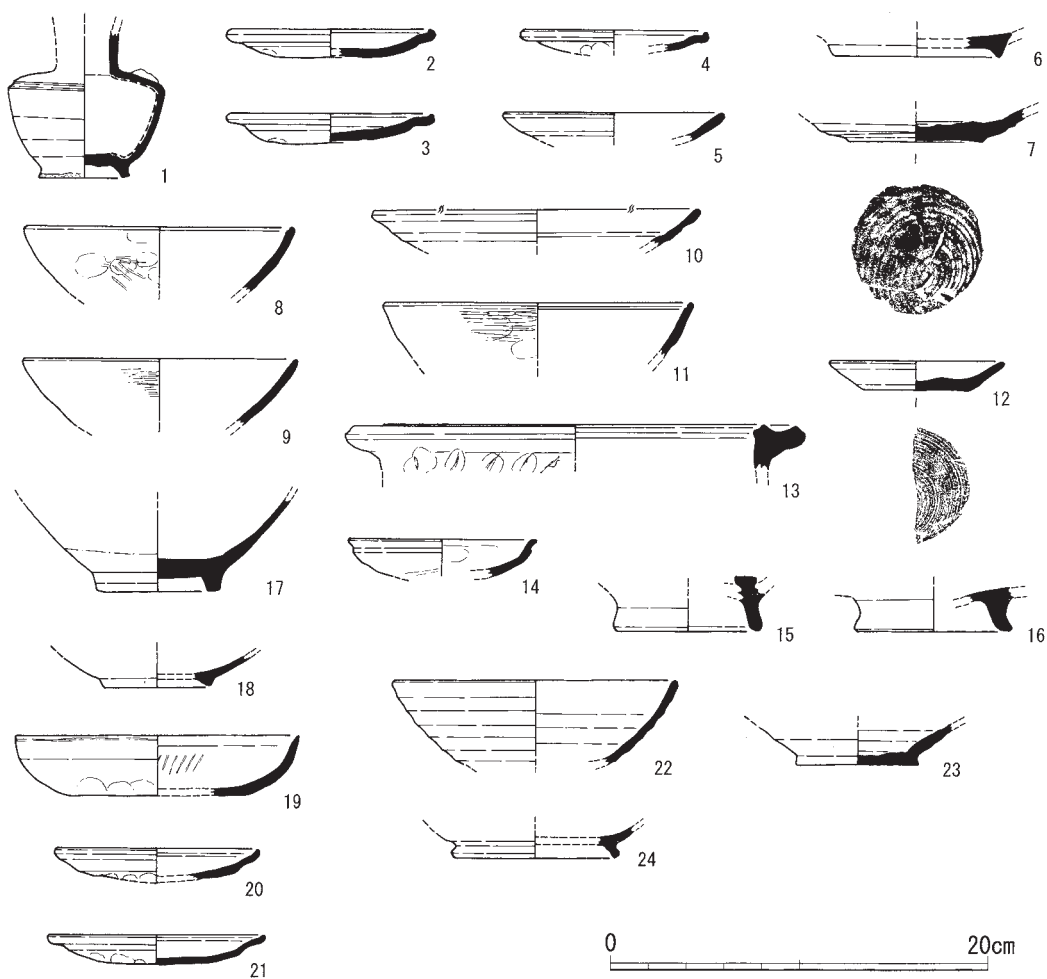
④その他の遺構 耕作に伴うと思われる素掘り溝S D 01～07を検出し、白磁碗や瓦器皿、土師器碗・杯などが出土した(第14図14～17)。また、調査区の南東隅で大型の土坑S K 25を検出し、瓦器碗の底部の破片が出土した(第14図18)。

(3) 包含層出土遺物

遺構面の精査中もしくは古墳の周溝が埋没する過程で混入したものについて、包含層出土遺物として報告する(第14図19～24)。

19は土師器杯Aである。内面に暗文を施す。奈良時代のものと考えられる。20・21は土師器皿である。いずれも「て」字状口縁を呈する。21はやや薄手の作りである。22は須恵器碗の口縁端部である。23は須恵器碗の底部である。平高台で、見込み部分が凹む。糸切り痕跡が認められる。24は灰釉陶器碗もしくは皿の底部である。20～24は平安時代のものと考えられる。

(筒井崇史)



第14図 D 6 地区出土遺物実測図

9. D9地区の調査

D6地区の南側、農道を挟んで設定した調査区である。同じ水田の北端部は遺構面が保護されることから調査は行っていない。耕作土と床土を除去すると、おおむね地山となり、調査地南半部に遺物包含層が存在する。地山上で、古墳時代と中世の遺構・遺物を検出した(第15図)。

(1)古墳時代の遺構・遺物

墳丘が完全に削平された古墳1基を検出した。古墳は横穴式石室を内部主体とする。

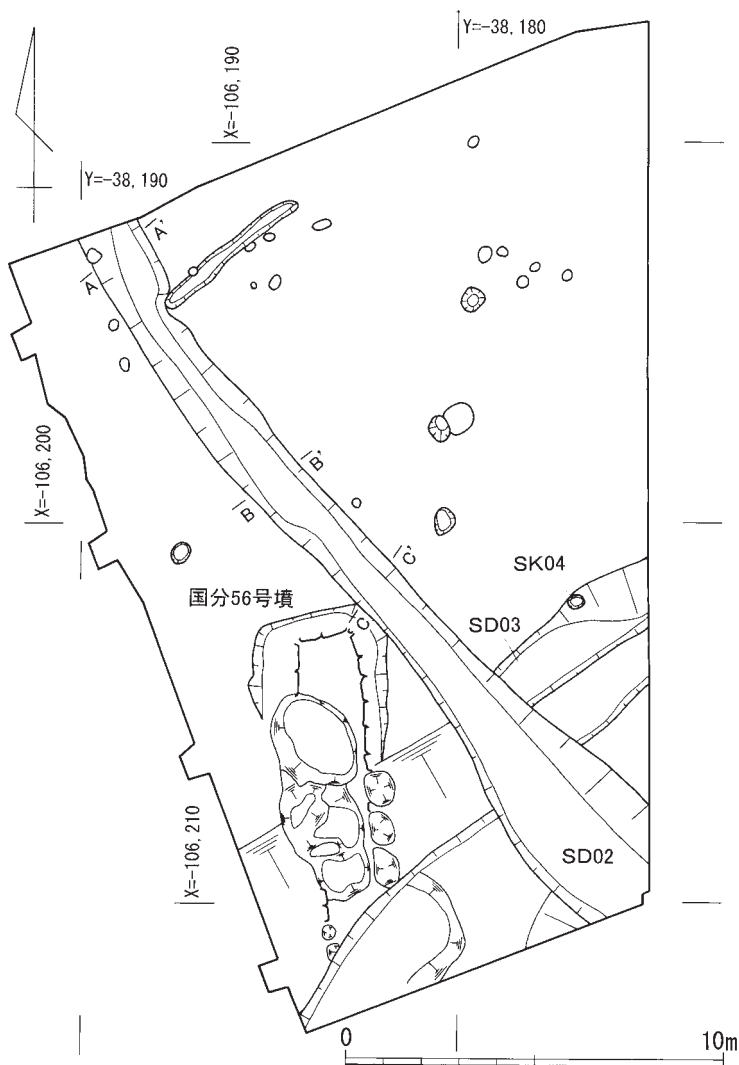
①国分56号墳

位置 D9地区の南半部に位置する。石室床面の標高は約118.7mである。

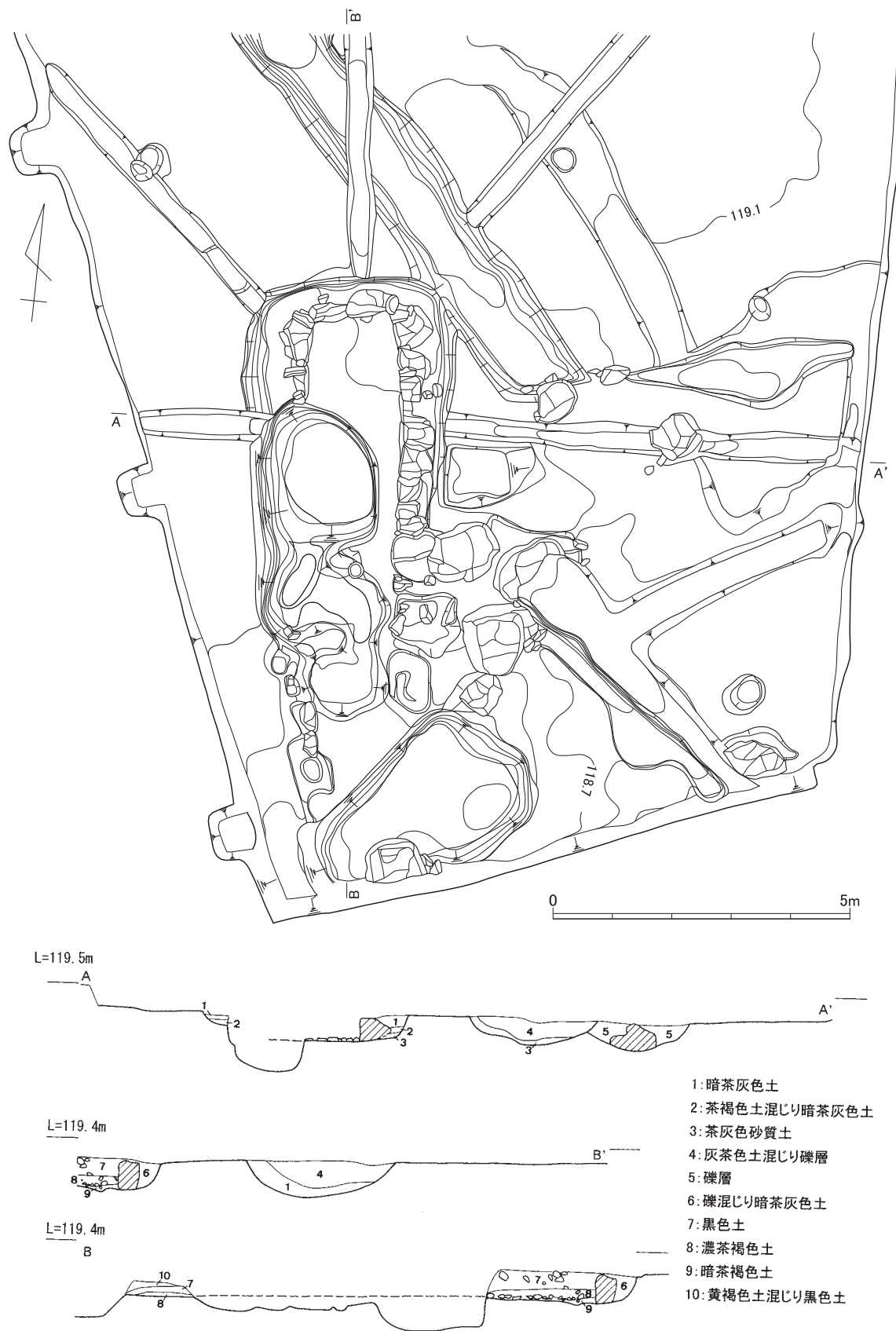
墳丘(第16図) 墳丘だけでなく、周溝の痕跡も検出することができず、墳丘は完全に削平されてしまったと考えられる。したがって、古墳の規模や墳形は不明である。

石室(第17図) 上半部が完全に破壊されており、石室は基底石から1、2石分が残存するにすぎない。玄室の左側壁は奥壁から約4mまでの基底石が残存していた。羨道部の左側壁は石材を東に向かって倒されたような状況で検出した。右側壁は奥壁から約1.4mまでと羨道部で2石を検出した。右側壁の玄室中央付近から羨道部にかけての石材は抜き取られ、直径1.2mないし2m、深さ0.3~0.7mの楕円形を呈する土坑が、床面を大きく破壊して穿たれていた。この土坑から一辺約0.8~1.5mを測る石材を検出した。

以上のような石材の残存状況や抜き取り痕から、石室の規模は、全長8.5m、奥壁付近で幅1.4m、玄室中央付近で幅1.6m、羨門付近で幅1.1mを測る。玄室中央付近が最大幅となる、いわゆる胴張りの石室である。右側壁の大半は抜き取られていたが、左側壁を中軸ラインで反転すると、残存する右側壁付近になることから、無袖式の横穴式石室と考えられる。敷石の範囲から玄室と羨道が区別でき、玄室長3.6m、羨道長4.9mを測る。



第15図 D9地区検出遺構配置図 (1/200)



第16図 国分56号墳墳丘測量図および土層断面図

折り込み

折り込み

掘形は、羨道部での石材の抜き取りによって攪乱されているため、全長は不明である。確認できたのは4.2m分のみである。なお、幅は約3.6m、深さは約0.6mである。石室の主軸は北に対して約6°西に振る。

奥壁は2石の大型石材を用いている。側壁は0.4～0.7m大の石材を使用している。平坦な自然面を意識しており、小規模な礫で安定を図っていた。玄室床面には、長さ15～25cm、幅10～20cmほどの扁平な石を敷き詰めて敷石とする。右側壁と奥壁付近には30～40cmを測る扁平な石を、敷石より3～5cm高く据えていたことから、棺台の可能性もある。なお、石室の破壊時期については、石材を廃棄した土坑から遺物が出土せず、明確な時期については不明である。

遺物出土状況(第17図) 古墳に伴う遺物には、須恵器・土師器、鉄器(銀装鉄刀・鉄鏃・鉸具・鐙・刀子)などがある。出土土器のうち、4・6・8・9・15・18・19・21・26・27は古墳に伴うと思われる遺物であるが、石材の抜き取り穴や中世の溝SD03から出土したもので、石室が破壊された際に混入したものと考えられる。

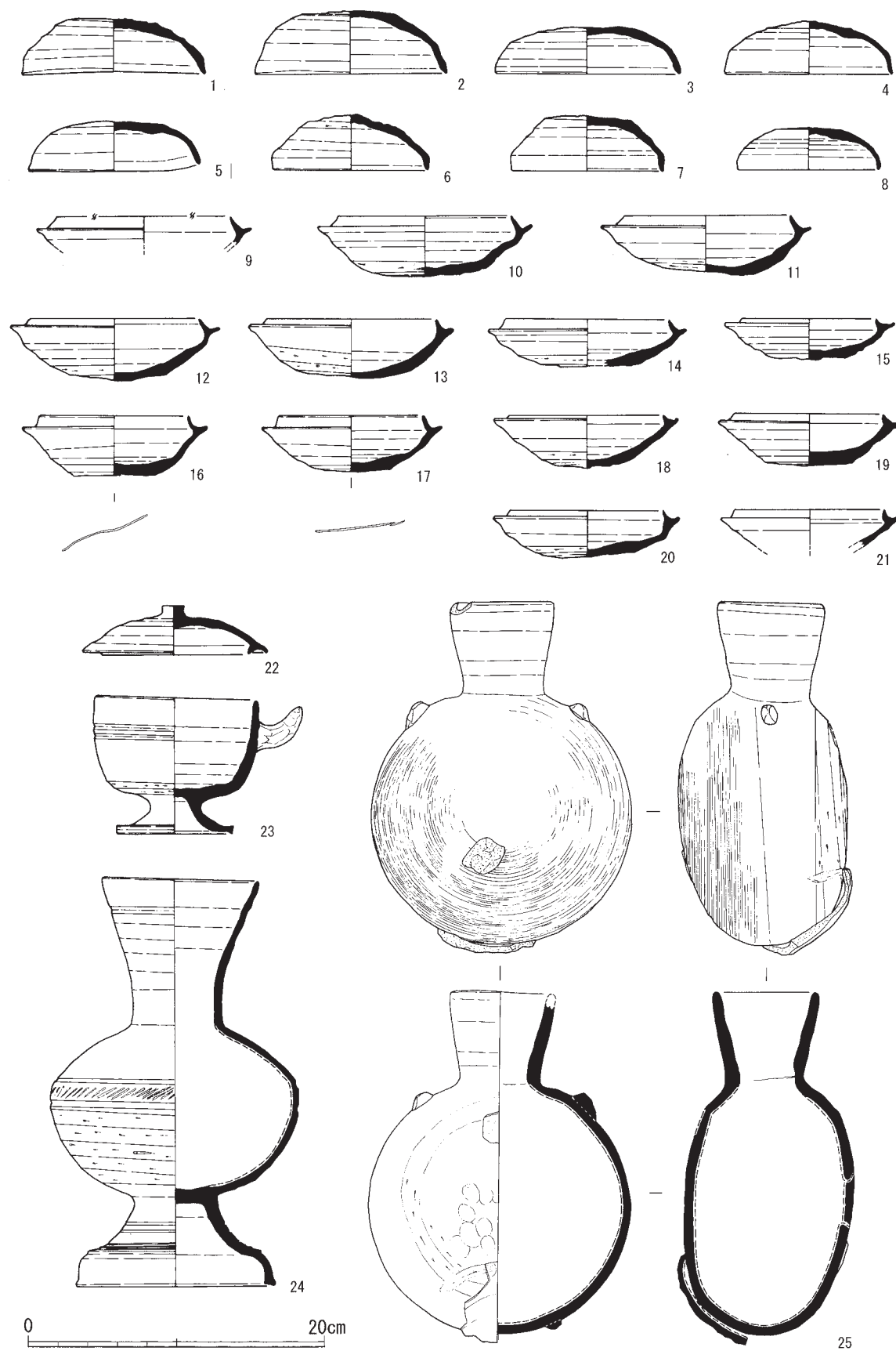
須恵器杯H蓋(1)・提瓶(25)、および銀装鉄刀(31)は羨道部の左側壁沿いの床面直上から出土した。なお、銀装鉄刀が羨道部から出土しているが、後世に動かされた可能性もある。馬具(51～57)は玄室中央の右側壁寄りの敷石上からまとめて出土した。おおむね原位置をとどめていると思われる。この範囲以外から出土した須恵器や鉄器などは、接合状況や敷石よりわずかに浮いた状態で出土したことなどから、原位置はとどめていないと考える。出土した須恵器に時期差が認められることから、追葬が行われたと考えられる。ただし、その回数については不明である。

これらの副葬品以外に、奈良時代の須恵器杯A(30)が羨道部床面よりも約20cmほど浮いた状態で出土した。

(岡崎研一)

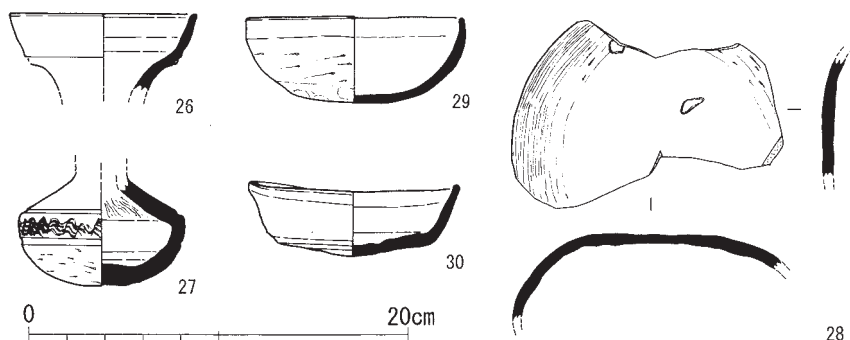
出土遺物(第18～21図) 国分56号墳に伴う遺物として、須恵器28点、土師器1点、鉄器34点がある。また混入品として奈良時代の須恵器1点がある。

1～28は須恵器である。1～8は杯H蓋である。いずれも天井部はヘラキリ後不調整である。若干、焼け歪むものもあるが、法量から3グループほどに分けられる。9～21は杯Hである。底部は13・16・17・20が回転ヘラケズリ調整を施す。ただし、ケズリ残した部分もみられる。その他はヘラキリ後不調整である。26・27は甕の口縁部と体部である。体部外面の中位に波状文を施し、その上下に沈線を1条ずつめぐらす。底部には手持ちのヘラケズリ調整を施す。22・23は脚台付碗とその蓋である。ともに完形品である。22は内面にはかえりが見られ、ボタン状のつまみを有する。外面には自然釉が厚く付着している。23は牛角状の把手を持つ。23に22を載せると、上方からの自然釉の被り方が一致することから、セット関係にあると考えられる。24は脚台付長頸壺である。外上方に向かって開く口頸部と丸味を帯びた体部に、脚台が付く。体部は最大径付近に刺突文を施し、その上下に沈線を1条ずつめぐらす。体部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。25・28は提瓶である。25は完形品である。外面に杯H蓋が融着している。湾曲する面にカキメ、平坦な面に回転ヘラケズリ調整を施す。28は体部の破片である。



第18図 国分56号墳出土遺物実測図(1)

29は土師器杯である。やや内湾気味の口縁部に、丸底の底部である。口縁部にはヨコナデ調整、その下半は手持ちのヘラケズリ調整、底部はナデ調整を施す。



第19図 国分56号墳出土遺物実測図(2)

30は須恵器杯Aである。焼け歪んでいるが、奈良時代のものと考えられ、古墳に伴うものではない。

(筒井崇史)

31～62は国分56号墳出土の鉄製品で、武器・工具・馬具・鏃などがある。

31は大刀である。全長78.9cmを測る。鞘の木質の一部が遺存する。鐔は鐔と別造りとなった喰出鏝であり、鏝部分に銀の薄膜がみられる。鉄地銀張とみられる。刀身はいわゆるカマス切先をもち、関は刃関であり、背関は現状では確認できないが、茎との関係から両関であるとみられる。茎には2か所の目釘孔が確認される。また目釘穴の間には径1.0～1.2cmを測る孔があり、方頭大刀であったものとみられる。

32～36は大刀(31)に伴う刀装具である。足金具(33)は吊金具部が中心にはこず、わずかに佩用側によるものとみられる。銀などの装飾は認められない。

37～48は鉄鏃である。総数8点以上を数える。いずれも同一型式の長頸鏃であり、鏃身部は腸袂をもつ三角形を呈する。箆被は棘状箆被である。

49は刀子である。刃部で折れ曲がっているが、2次的な土圧による変形とみられる。茎には木質が遺存しており、関は確認できない。

50～57は馬具である。50・51は鞍の鞍金具の可能性のある鉸具である。51には皮革状の付着物が観察される。52～55は木製鐙に伴う金具である。52・53は鉸具である。それぞれ、T字形の別造りの刺し金をもち、下部には革もしくは布製の鐙鞆を接続するための軸をもつ。54・55は鍔先金具である。両者とも左右3鉸で構成され、ほぼ同形同大である。付着物からは鐙鞆本体の材質を窺うことはできなかった。

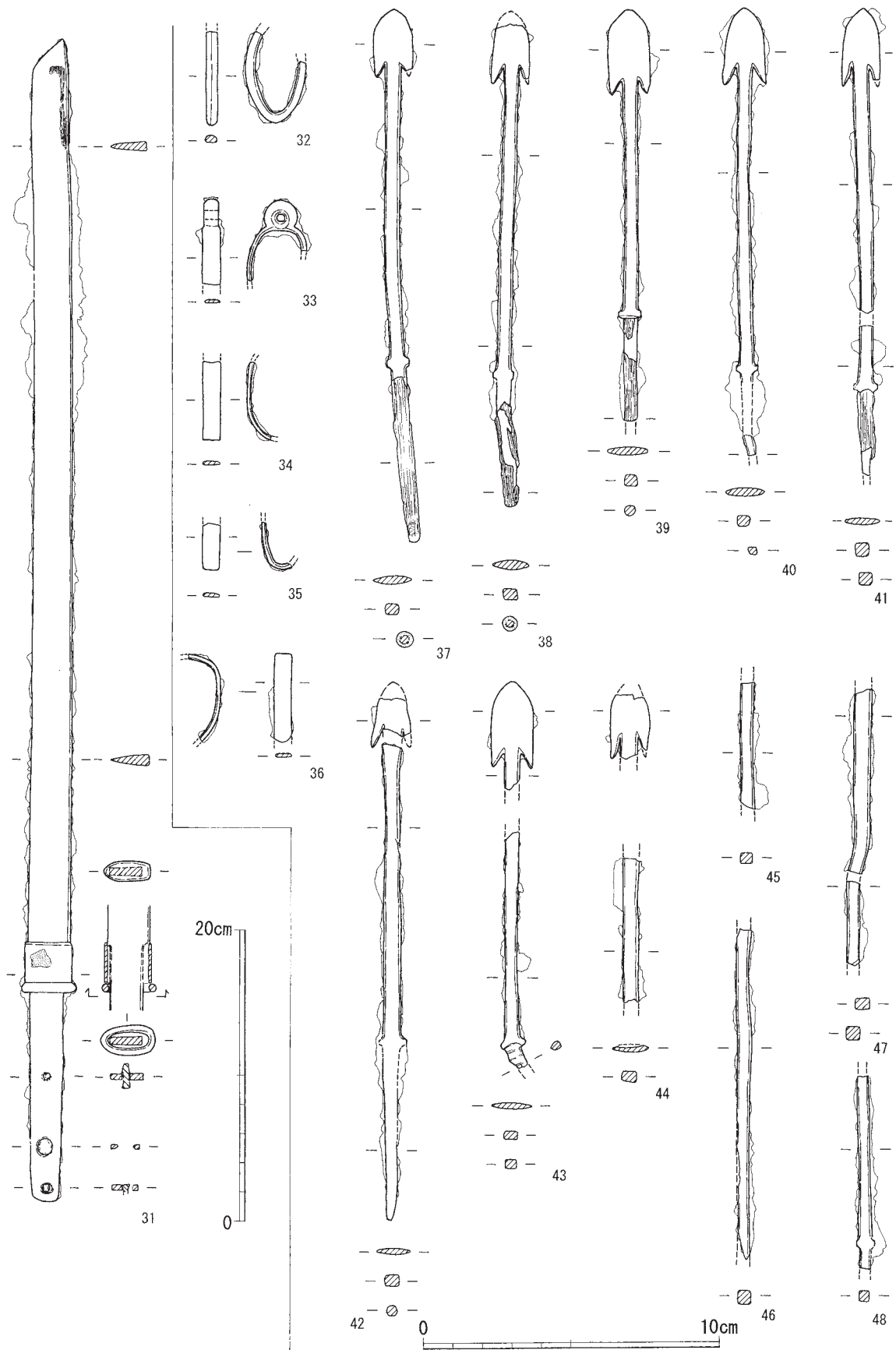
56は環状の鉄製品である。下辺はやや直線的に造られている。性格については不明であるが、50・51と劣化の度合いが酷似しているため、馬具の可能性が高い。革金具などの用途が考えられる。

57・58は小型の鏃である。58は先端に木質が認められる。

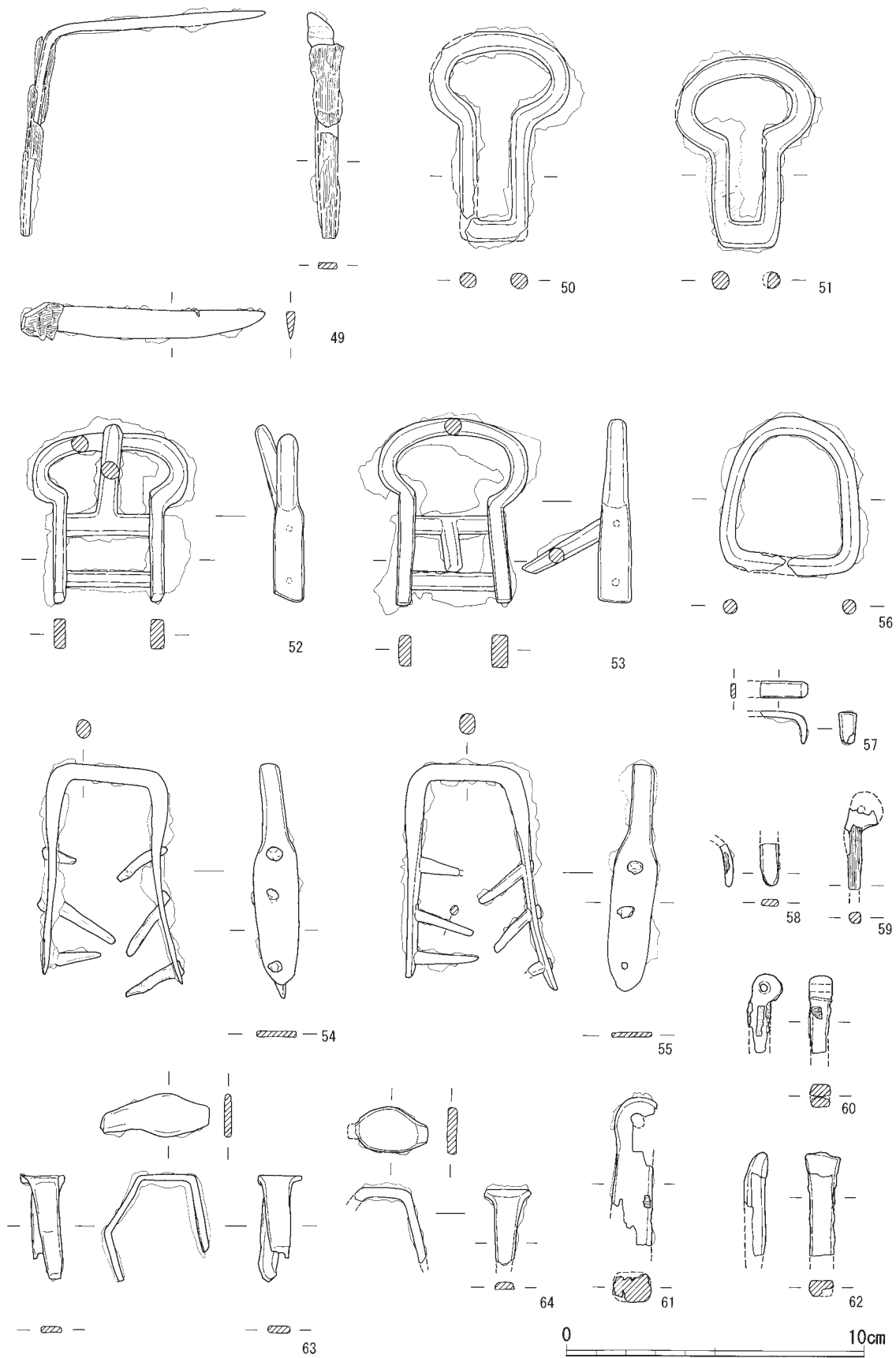
59～62は棒状の鉄製品である。いずれも欠損しているため、全容は不明であるが、頭部を環状に造り出している。59・60は鞍の鞍金具の刺し金の可能性を考えておきたい。61は轡の一部である可能性がある。62は性格不明である。

63・64は大型の鏃状の鉄製品である。

(石崎善久)



第20図 国分56号墳出土遺物実測図(3)



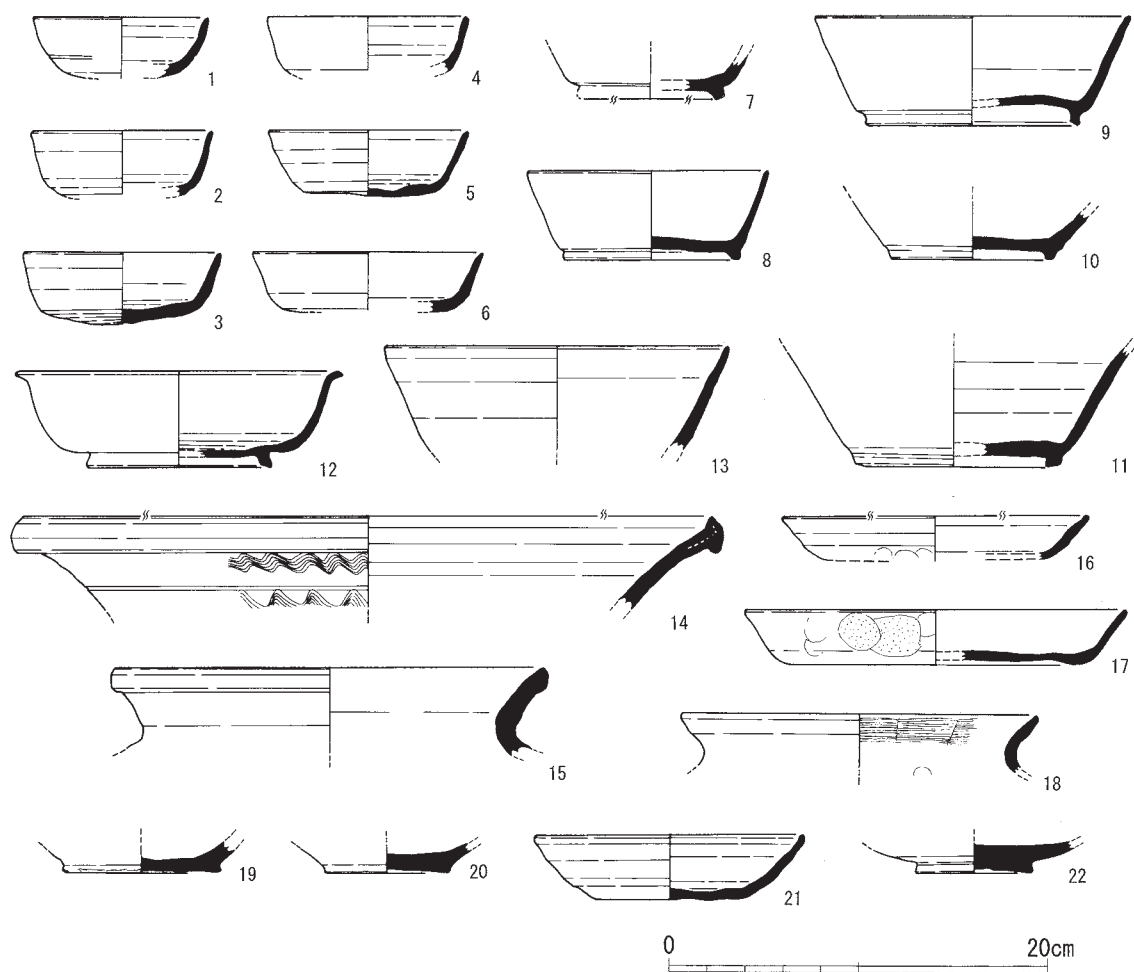
第21図 国分56号墳出土遺物実測図(4)

(2) 中世の遺構・遺物

中世の遺構として溝2条、土坑1基を検出したほか、調査地南半部に南北5.5m、東西10mの範囲を覆う礫層から当該期の遺物が多量に出土した。礫層は調査地南端ほど厚く堆積しており、溝S D02・S D03の埋土とほぼ同じである。

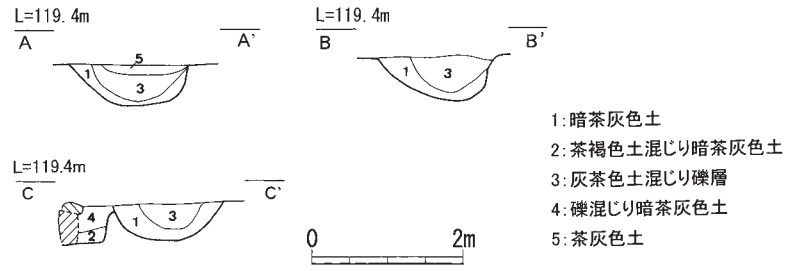
①溝S D02(第23図) 調査地を北西から南東に向かって縦断する。検出長22.5m、幅1.4~3.4m、深さ0.5~0.6mを測り、溝の方位は北に対して約40°西に振る。埋土は、下層が暗茶灰色土、上層が拳大から人頭大の礫を多量に含む灰茶色土混じり礫層である。調査地南側では溝S D03と交差するが、切り合い関係があり、S D02の方が新しい。

出土遺物としては土師器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器・国産陶器・白磁・青磁などがある(第25図23~81)。23~56は土師器皿である。41~43は深身のタイプである。24・26~29・33・37・41は口縁部外面のヨコナデが弱く、指掌文が残る。45~52は口縁端部が明瞭に外折するタイプで、屈曲によってできた口縁部内面の稜線より上部に粗いハケ調整が残るものもみられる。全体に器壁が厚い。53~56は大型の浅いタイプで、色調は乳黄色~灰黄色を呈するものが大半で、33・44は明橙色を呈する。57は土錘である。58は瓦質土器羽釜である。内面に粗い横方向のハケ調整がみられる。59は瓦質土器すり鉢である。4条一単位のすり目が施されているが、底部付近



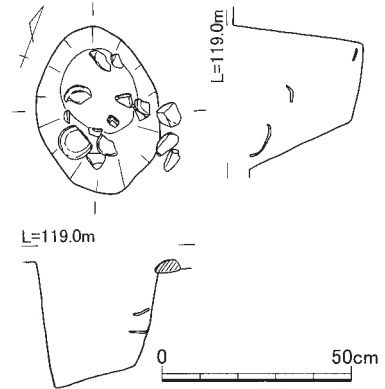
第22図 包含層出土遺物実測図(1) 奈良・平安時代

は使用による磨滅ですり目が失われている。60～62は丹波型瓦器碗である。60は内面にやや密な圈線ミガキが施される。61・62は内面に粗い圈線ミガキが、見込みにジグザグ状暗文が施さ



第23図 溝S D 02 土層断面図

れる。63・64は東播系須恵器鉢である。64は硬質の土師器のような焼成で、表面にピンホール状のくぼみが無数にみられる。65・66は丹波焼甕である。65の外面には自然釉が掛かる。65は還元焰焼成で灰色、66は酸化焰焼成で赤茶色～橙茶色を呈する。67・68は備前焼甕である。口縁部を折り返して玉縁をつくっている。67は還元焰焼成、68は酸化焰焼成である。69は陶器甕である。体部外面と底部外面には板ナデがみられる。色調は灰色を呈する。丹波焼か。70は丹波焼壺である。胎土はやや砂っぽく、色調は灰色を呈するが、外面は暗茶褐色を呈する。71は丹波焼鉢である。色調は橙茶色を呈する。72は陶器鉢である。内面は

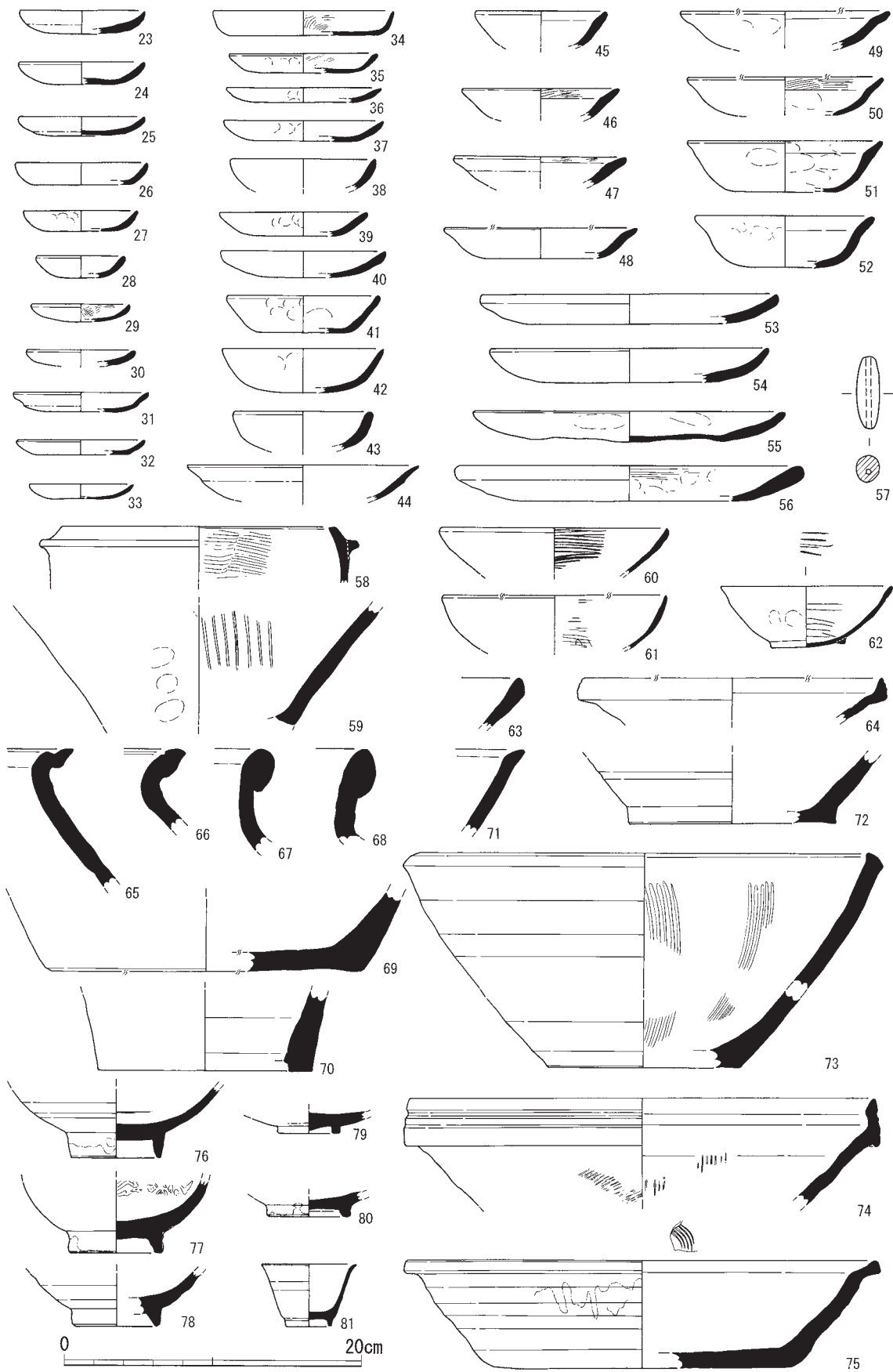


第24図 土坑S K 04 実測図

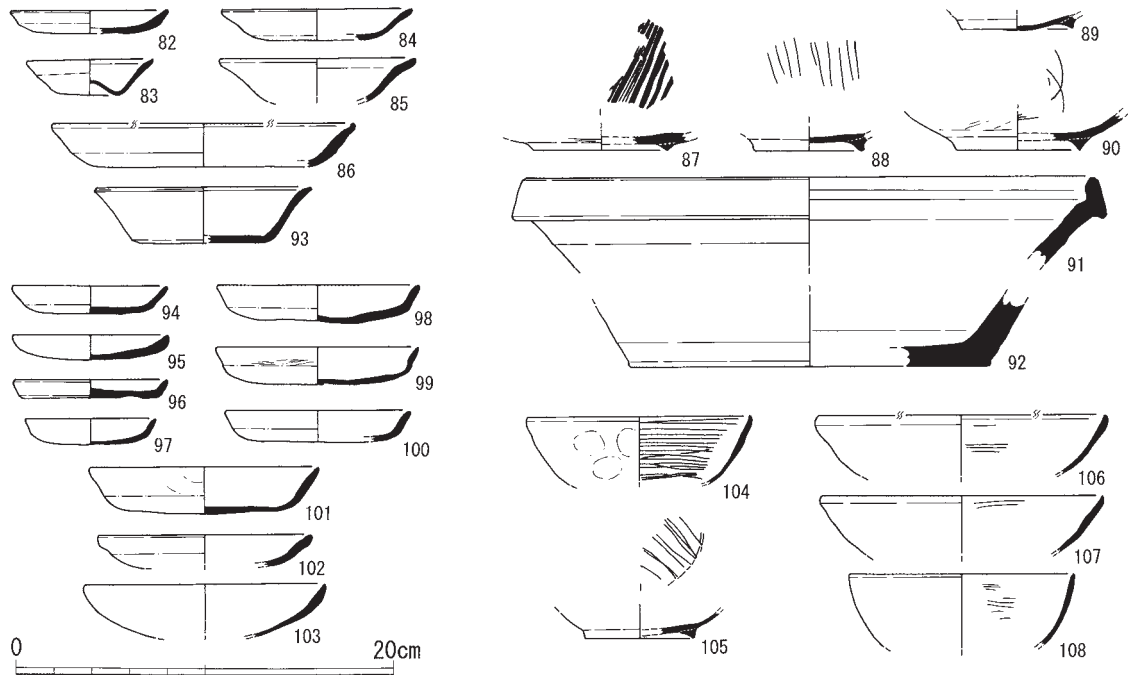
使用により非常に平滑になっている。色調は淡灰色で、胎土は黒色粒を含み緻密である。備前焼か。73・74は備前焼すり鉢である。73は5条一単位のすり目が施されている。色調は灰色を呈し、胎土は緻密である。74はすり目の一部が見えるが、何条一単位であるかはわからない。色調は赤茶色を呈する。75は古瀬戸折縁皿である。内底面中央に5条の櫛描き文が施される。76・77は白磁碗である。77の内面には印花文が施される。また、内面の体部から立ち上がる部分に円周方向の擦痕が顕著にみられる。78・79は青磁碗である。78は被熱により釉の表面がザラつき、一部は発泡している。79は白磁皿である。80は青磁である。底部は蛇の目に釉剥ぎされて露胎である。81は白磁小杯である。胎土に細かな黒色粒を含む。

②溝S D 03 調査地の南半部を北東から南西に向かって横断する。検出長14m、幅7m以上、深さ0.5mを測り、溝の方位は西に対して約35°南に振る。堆積土は茶灰色土と黒灰色土であるが、拳大から人頭大の石が多量に混じっていた。D 7 - 1 地区のトレンチ壁断面に、浅くU字状に窪む溝状の痕跡(S D 10)を確認することができた。S D 10はD 7 - 1 地区において平面的に検出することはできなかったが、S D 03と同じ堆積状況であり、延長上に当たることから、S D 03はD 7 - 1 地区まで延びていたと考えられる。当時の区画溝と考える。

出土遺物としては土師器・瓦器・東播系須恵器・国産陶器などがある(第26図82～93)。82～86は土師器皿である。82は乳橙色を呈する。83はヘソ皿、85は口縁端部が外折するタイプである。87～90は丹波型瓦器碗である。見込みの暗文は、87～89がジグザグ状、90が連結輪状である。91は東播系須恵器鉢である。肥厚した口縁部の外面と内面の全体に自然釉が掛かる。92は丹波焼壺



第25図 溝S D 02出土遺物実測図



第26図 溝S D 03・土坑S K 04出土遺物実測図

の底部である。底部外面が平滑に磨かれている。

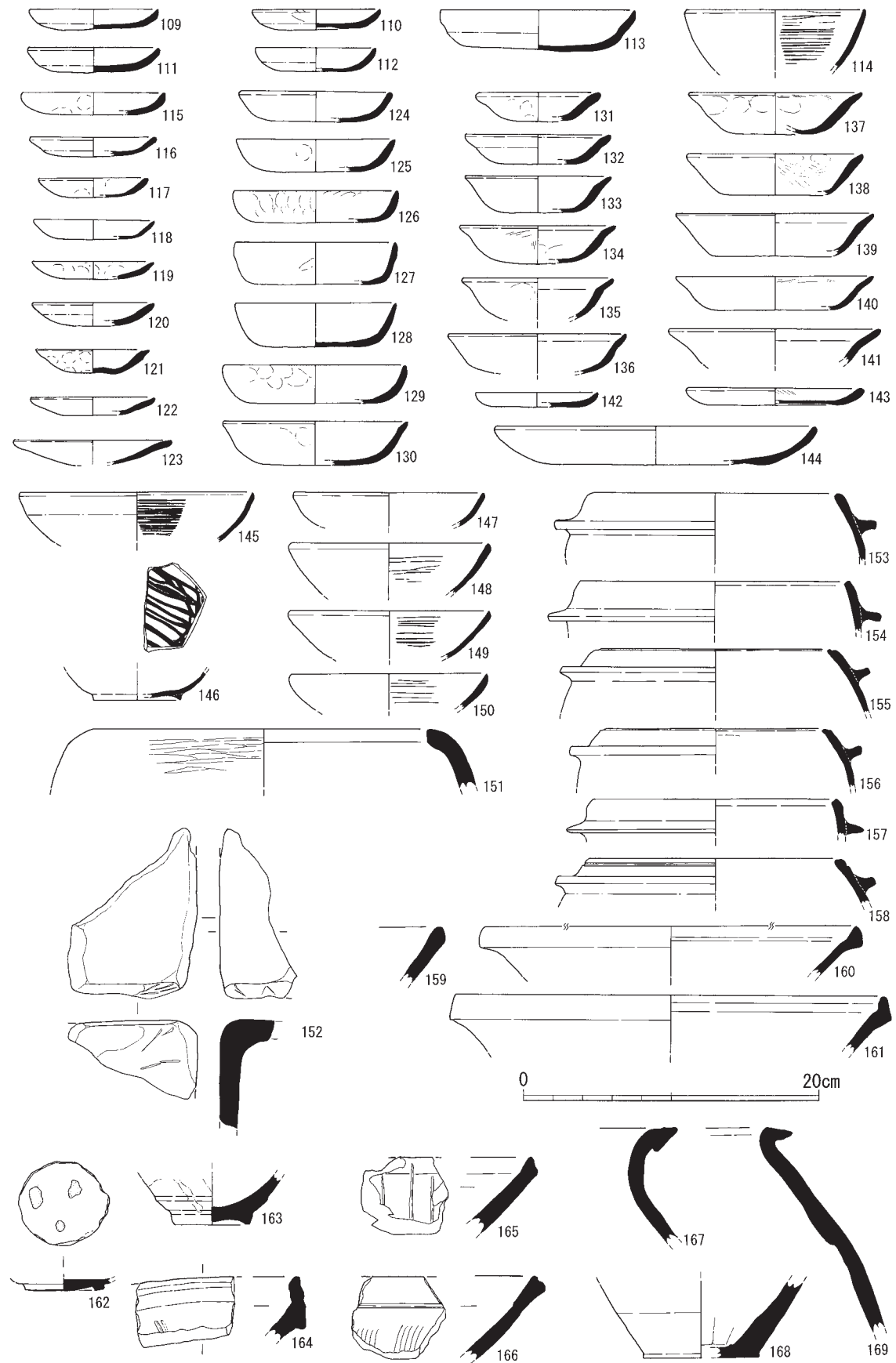
③土坑S K 04(第24図) 調査区の南半部、溝S D 03の北側肩付近で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.44m、短軸0.33m、深さ0.33mを測る。S D 03完掘時に認められたことから、S D 03以前の遺構と考える。

出土遺物としては土師器や瓦器などがある(第26図94～108)。94～103は土師器皿である。94～100は短く屈曲する口縁部の端部を尖り気味に納めるもの、101・102は緩やかに立ち上がる口縁部が「S」字状を呈するものである。104～108は丹波型瓦器椀である。13世紀中葉～後半の遺構と考えられる。

(岡崎研一・森島康雄)

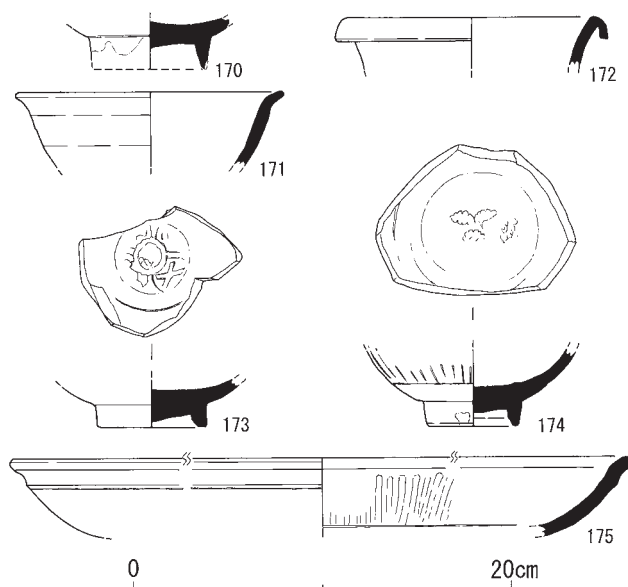
④国分56号墳羨門出土遺物 56号墳の羨門付近から土師器や瓦器などが出土した(第27図109～114)。109～113は土師器皿である。小皿は口縁部外面の面取りが形骸化したもので、13世紀中葉に位置付けられよう。114は丹波型瓦器椀である。口縁部内面にやや粗い圈線状ヘラミガキが施され、土師器皿よりはやや古い13世紀前葉のものである。

⑤礫層出土遺物 出土遺物として、土師器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器・国産陶器・白磁・青磁などある(第27図115～第28図175)。115～144は土師器皿である。115・117・119・124～130はヨコナデの後、口縁部外面に指押さえを施す。131～141は口縁端部が外折するタイプで口縁端部内面には粗いハケ調整が残る。142～144は口径に対して短い口縁部がわずかに立ち上がるタイプで、142・143の内面には粗いハケ調整がみられる。145～150は丹波型瓦器椀である。151は瓦質土器風炉である。外面は幅の広いヘラミガキ調整が全面に施される。152は瓦質土器方形火鉢である。底部には脚の剝離した痕跡がある。153～158は瓦質土器羽釜である。153は胎土に砂



第27図 国分56号墳羨門部・礫層出土遺物実測図

粒を多く含むやや粗い胎土である。158は口縁部外面に1条の沈線がめぐらされている。159～161は東播系須恵器鉢である。162は瀬戸灰釉である。内面に目跡が残っている。163は肥前陶器碗である。164は備前焼すり鉢である。片口部にかかる破片で、わずかにすり目がみられる。165は丹波焼すり鉢である。ヘラ描きのすり目が3条残っている。166は丹波焼すり鉢である。5条一単位の櫛描きによるすり目が認められる。167・169は丹波焼甕である。169の外面には薄い自然釉が掛かっている。168は丹波焼壺である。



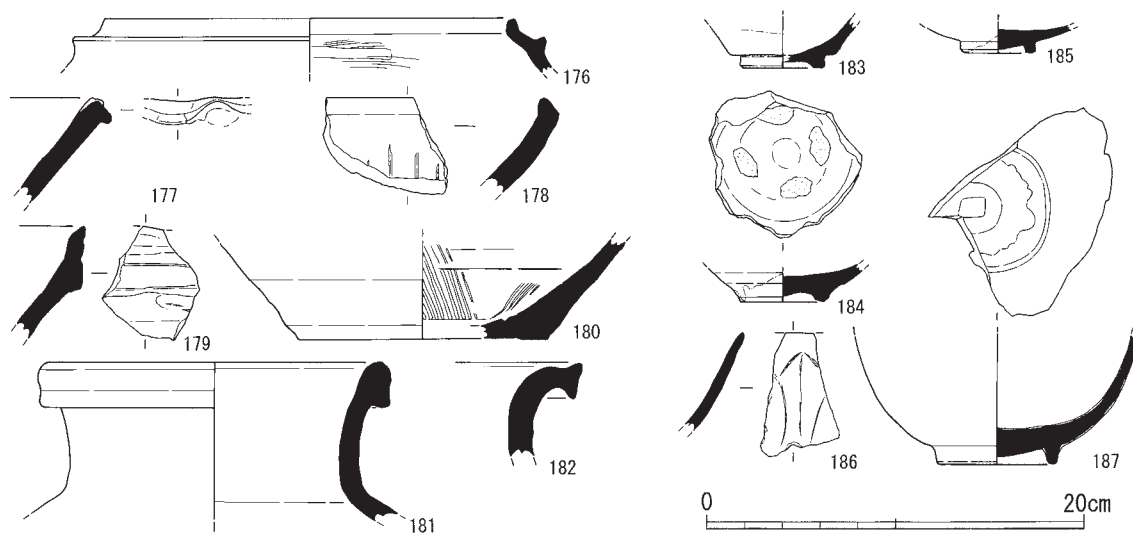
第28図 礫層出土遺物実測図

内面にヘラ調整の痕跡がみられる。170は白磁碗である。171は青磁碗である。被熱によって釉が縮み割れ、濁っている。172は白磁壺である。173・174は青磁碗である。173は見込みに印花文が施され、透明感のあるオリブ色の釉が掛けられている。174は見込みに草花の印花文が、外面には蓮弁文が施される。釉は不透明で青白色を呈する。175は青磁盤である。わずかに被熱して釉の表面がザラついている。

(森島康雄)

(3) 包含層出土遺物

①飛鳥～平安時代の遺物 大規模な破壊を受けていた国分56号墳の周辺や遺構面の精査中に出土した遺物のうち、飛鳥時代から平安時代にかけてのものを取り上げる(第22図1～22)。このうち、16～18は土師器、22は緑釉陶器で、その他は須恵器である。



第29図 包含層出土遺物実測図(2) 中世

1～5は杯Gもしくは杯Aで、飛鳥時代のものである。6は杯Aである。7～11は杯Bである。高台の形態をみると時期差があるようで、7～9は奈良時代前半、10・11は奈良時代後半のものようである。12は典型的な金属器を模倣した杯Fで、奈良時代前半頃のものであろう。13は杯の口縁部である。14・15は甕の口縁部である。14は外面に波状文が施される。16は杯A、17は皿C、18は甕である。6～18は奈良時代のもと考えられる。19・20は碗の底部で、外面に糸切り痕がみられる。21は杯Aである。口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。22は緑釉陶器碗の底部と考えられるが、施釉されておらず、無釉陶器の可能性もある。高台は削り出し高台で、内面にヘラミガキ調整が施される。

この時期の土器は、D 1～D 6地区に比べると、やや多く出土しているように思われる。これはD 9地区が丹波国分寺に近いことと関係があるのかもしれないが、当該期の遺構は全く認められなかったため、詳しくは不明である。

(筒井崇史)

②中世の遺物 国分56号墳の周辺や遺構面の精査中に出土した遺物のうち、中世のものについて取り上げる(第29図176～187)。

176は土師器羽釜である。177は陶器鉢である。片口部の破片で、口縁端部が外に折れる。丹波焼か。178は丹波焼すり鉢である。ヘラ描きによるすり目が認められる。179・180は備前焼すり鉢である。179は片口部にかかる破片で、外面に重ね焼きの痕跡がみられる。180は10条一単位のすり目がみられる。内面は使用による磨滅で平滑になっている。181は丹波焼壺である。外面は自然釉が厚く掛かり、二次的に被熱して発泡している。182は陶器甕である。丹波焼か。183は瀬戸美濃焼天目茶碗である。体部下半は露胎である。184は肥前陶器皿である。見込みには砂目が認められる。185は白磁皿である。畳付部分が研磨され平滑になっている。186・187は青磁碗である。186は外面に鎬蓮弁文、187は見込みに印花文が施される。高台内は蛇の目に露胎である。

(森島康雄)

10. D7地区の調査

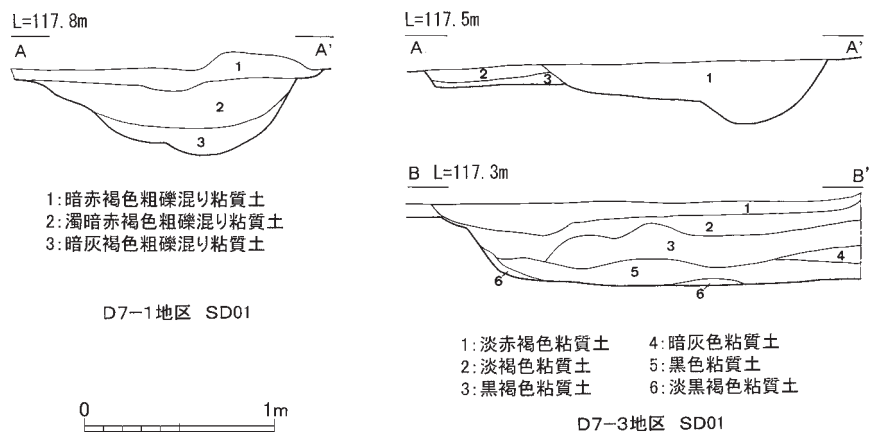
D9地区の南西約50mに設定した調査区である。東西方向に長い調査区で、総延長は120mにも及ぶ。対象地は複数の水田からなるため、水田ごとに枝番号を付すこととし、東から順にD7-1～D7-5地区とした。以下、調査地区ごとに主な遺構・遺物について報告する。

(1) D7-1地区の遺構

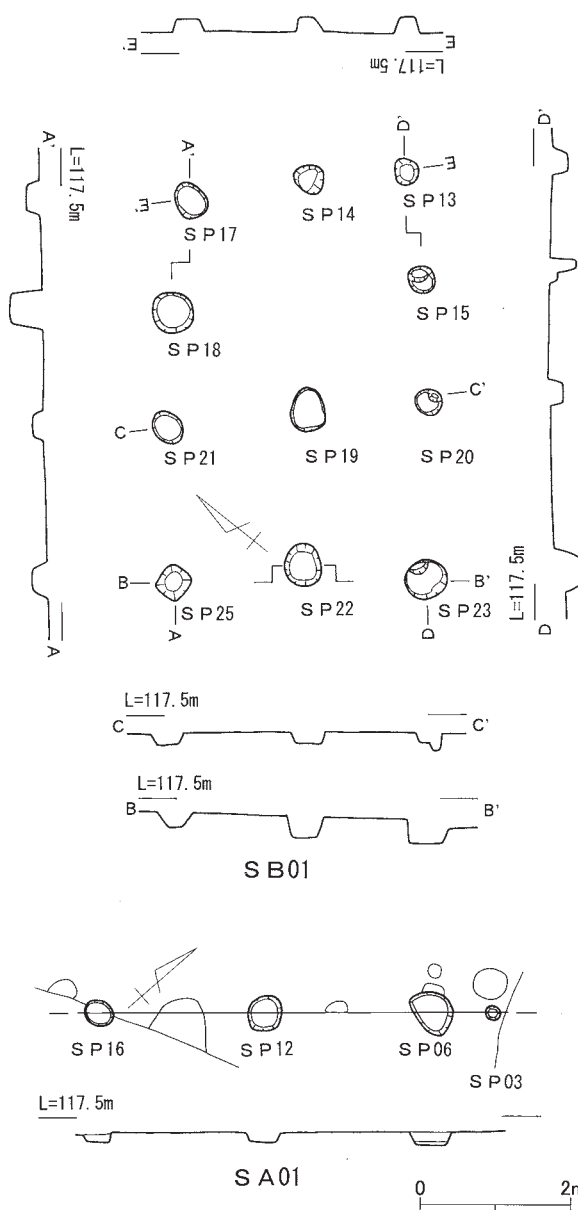
最も東に設定した調査区である。溝1条、土坑3基、柱穴4基を検出した(第30図左上)。溝S



第30図 D7-1～3地区検出遺構配置図(1/200)



第31図 D7-1地区溝SD01、D7-3地区溝SD01土層断面図



第32図 D7-3地区掘立柱建物跡
SB01・柵SA01実測図

D01は検出長9m、幅1.25～1.5m、深さ20～40cmを測る。土師器片などが少量出土した。土坑SK02は調査区東端で検出した。部分的な検出で、深さは約30cmを測る。土坑SK08は平面形が楕円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ約20cmを測る。SD01の西側を壊して掘削されている。土坑SK09は長軸1.2m、短軸0.8m、深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。柱穴は、いずれも直径25～30cmの小規模なものである。土坑・柱穴とも、出土遺物はみられない。

また、溝SD10は、トレンチ壁面において確認した溝である。溝の幅は2.2m以上である。埋土は拳大の礫で、D9地区において溝SD03として報告した溝の延長部分に当たると考える。

(2) D7-2地区の遺構

D7-1地区の西側に設定した調査区である。柱穴3基を検出したのみである(第30図左下)。いずれも小規模なものである。トレンチの西端にはわずかに落ち込みがみられる。なお、遺物は出土していない。

(黒坪一樹)

(3) D7-3地区の遺構・遺物

D7-2地区の西側、農道を挟んで設定した調査区である。遺構面は礫混じりの黒褐色粘質土である。溝1条、掘立柱建物跡1棟、柵1条のほか、土坑および柱穴を多数検出した(第30図右)。柱穴出土遺物はほとんどが中世前期で、包含層から平安時代後期の土器が出土している。

①溝S D01(第31図) 調査区の南辺で検出した。幅が一定せず、若干蛇行するが、北西から南西に向かって流れる。検出長25m、幅2.5～3.5m、深さ25～45cmを測る。埋土は、上層が礫を含む黒褐色粘質土、下層が暗褐色粘質土である。

土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器(備前・丹波・瀬戸)、瓦などが出土した(第39図47～51)。47～49は土師器である。49は口クロ成形で、糸切り底である。50は13世紀後半の龍泉窯系の青磁で、見込みには双魚文が施される。51は丹波焼すり鉢である。他に12世紀と15世紀の白磁碗が出土した。

②掘立柱建物跡S B01(第32図上) 調査区の東半部で検出した。桁行・梁行ともに2間で、南西側に庇を持つ建物である。建物の方位は北に対して約49°東に振る。柱間は、2.1mおよび1.5mを測る。柱穴は径25～40cmの円形である。柱穴S P14から土師器と丹波焼すり鉢が出土した。

③柵S A01(第32図下) 掘立柱建物跡S B01の南東側で2間分を検出した。直径40cm前後を測る柱穴3基からなる。柱間は2.2m等間である。方位は北に対して約40°東に振る。

④土坑S K76 掘立柱建物跡S B01の西側で検出した一辺1mの隅丸方形の土坑である。埋土から平安時代後期の須恵器杯が1点出土した(第39図52)。底部はヘラ切りである。

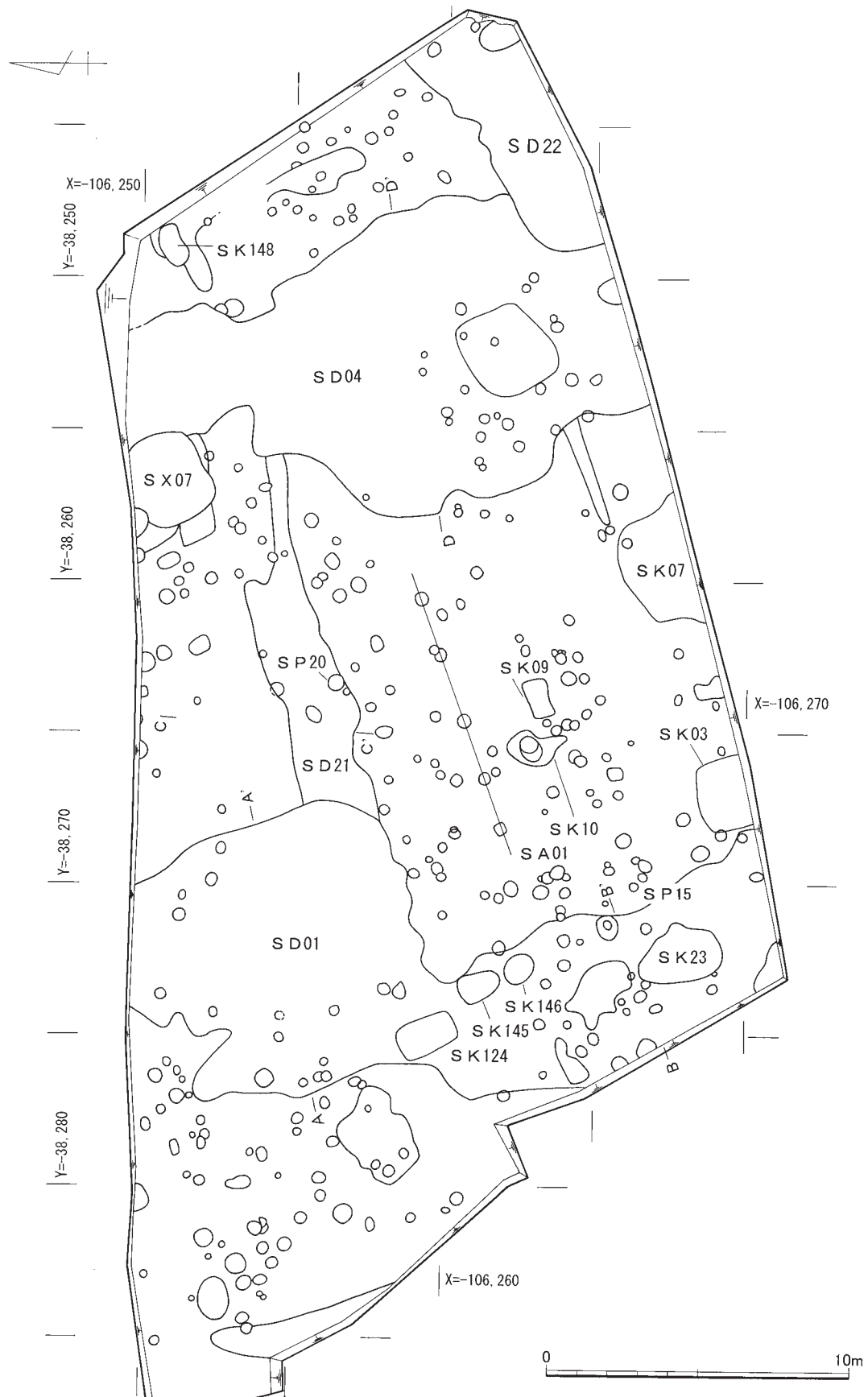
(4) D7-4地区の遺構・遺物

D7-3地区の西側に設定した調査区である。遺構は黒褐色礫混じり粘質土の上層と暗褐色礫混じり粘質土の下層で検出した。上層では、大規模な溝4条や池状遺構のほか、石組みを有する中世墓2基、大小の土坑および柱穴などを検出した。下層では、多数の柱穴を検出した。遺構の時期は平安時代後期から中世後期までである。上・下層とも多くの柱穴を検出したが、掘立柱建物跡を抽出するに至らず、平安時代の柵を復原できたのみである(第33図)。

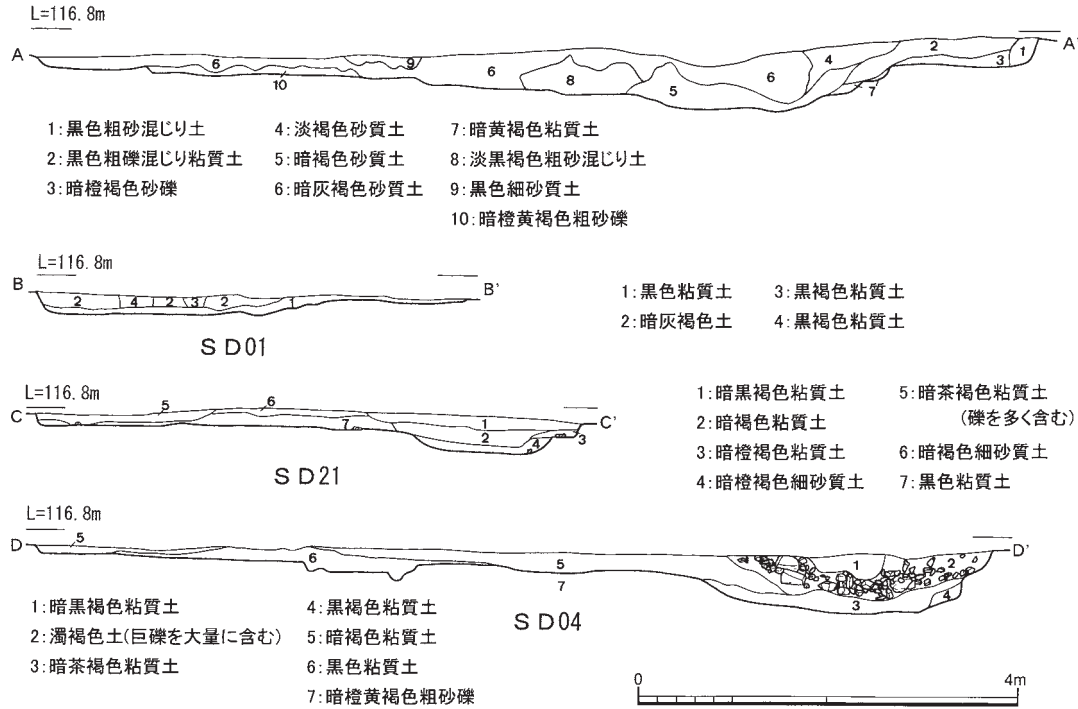
①溝S D22 D7-3地区で検出した溝S D01の延長部に当たる。検出長8.5m、幅2.5m以上、深さ約15cmを測る。後述する溝S D04と切り合い関係にあり、S D22の方が新しい。

②溝S D04(第34図下段) 南北方向に掘られ、検出長17m、幅4～10m、深さ10～60cmを測る。出土遺物には土師器(第38図26～33)、東播系須恵器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器のほか鉄滓(碗形滓、第39図54)がある。33は硬質で外面にタタキを施す丹波型土師器鍋で、25は土錘である。国産陶器には15世紀代の備前焼すり鉢がある。輸入陶磁器は、白磁・青磁ともに12世紀から15世紀までの碗・皿類が出土しており、中心時期は13世紀代である。白磁には玉縁碗や口禿げの皿、輪花や碁笥底の皿がある。青磁には龍泉窯系や同安窯系の碗のほか、注目される資料として青白磁の壺片がある。

③溝S D01(第34図上段・中段上) 南北方向に掘られた溝である。検出長20m、幅3～5m、深さ20～60cmを測る。後述する溝S D21と重複するか所は池状に落ち込んでおり、その規模は



第33図 D7-4地区検出遺構配置図(1/200)



第34図 D7-4地区溝S D 01・04・21土層断面図

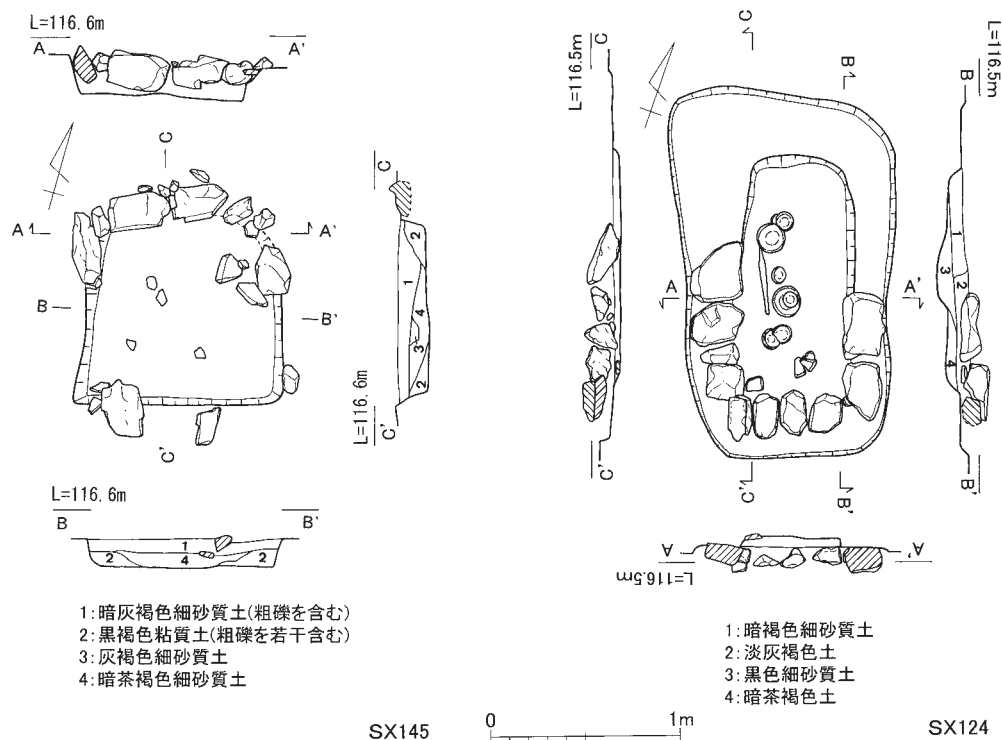
一辺5mほどの方形を呈し、深さ60cmを測る。出土遺物は13世紀代の土器(土師器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器)が多く、他に輸入陶磁器、国産陶器のほか鉄製雁股鎌(第39図55)や火打金(第39図56)などが出土した。輸入陶磁器は、12世紀から15世紀代の白磁や青磁の椀・皿類が出土しており、中心時期は13世紀代である。白磁には玉縁椀や口禿げの皿、輪花若しくは碁笥底の皿がある。38は同安窯系の青磁碗である。国産陶器には備前焼のすり鉢や丹波焼の甕がある。また、少量ではあるが緑釉陶器や須恵器など、奈良時代から平安時代にかけての土器も出土した。

④溝S D 21(第34図中段下) 東西方向に掘られた溝で、検出長11.5m、幅0.5~2.5m、深さ20cmを測る。埋土からは13世紀から15世紀にかけての土器が出土した(第38図34~42)。34・35は土師器皿、36・37は瓦器、39・40は瓦質土器すり鉢である。39・40の内面にはハケ調整の後、ヘラ描きによるすり目が施される。41は瓦質土器羽釜、42は備前焼すり鉢である。42の内面には7条一単位の櫛描きによるすり目が施される。

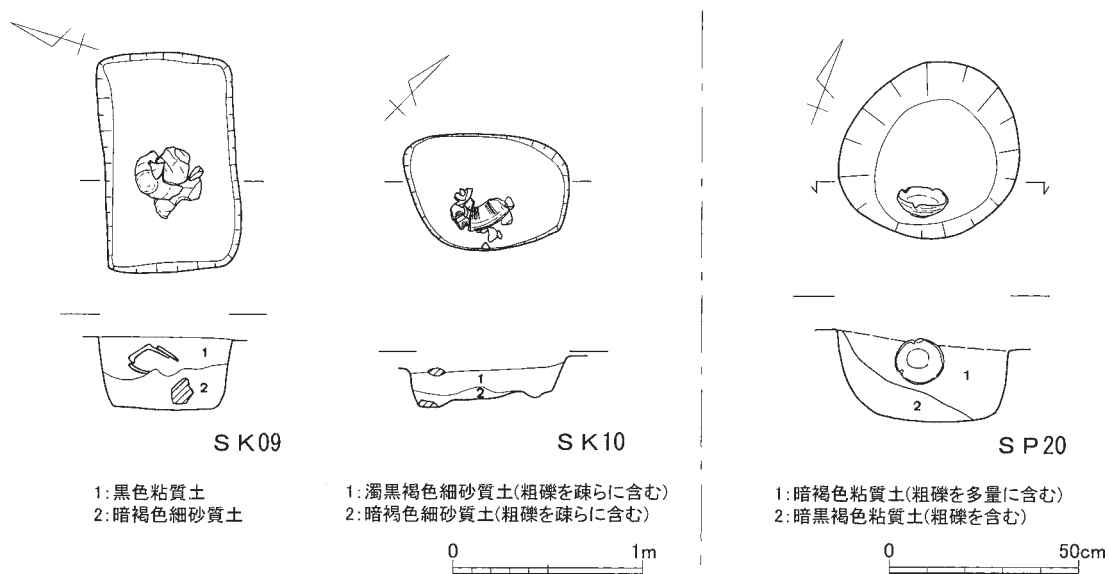
⑤中世墓S X 145(第35図左) 石組みを有する。平面形は一辺1mの正方形で、深さ15cmを測る。北辺の一辺に角礫が残存していた。

⑥中世墓S X 124(第35図右) 石組みを有する。平面形は隅丸長方形で、長辺2m、短辺0.8~1.2m、深さ20cmを測る。角礫が長辺の南半および南短辺に配されている。中央やや西寄りでは複数の土師器皿が重ねられた状態で出土した(第38図1~10)。12世紀末から13世紀初頭頃のものと考えられる。また、鉄製の小刀(第39図53)1点が、石組みの長辺に沿うようにして切っ先を南にして出土した。これらは出土位置から副葬品と考えられる。

⑦土坑S K 09(第36図左) 長方形の土坑で、長辺0.6m、短辺0.35m、深さ20cmを測る。中から底部を斜め上にした壺の破片が出土した(第38図45)。丹波焼か。



第35図 D7-4地区中世墓SX124・145実測図

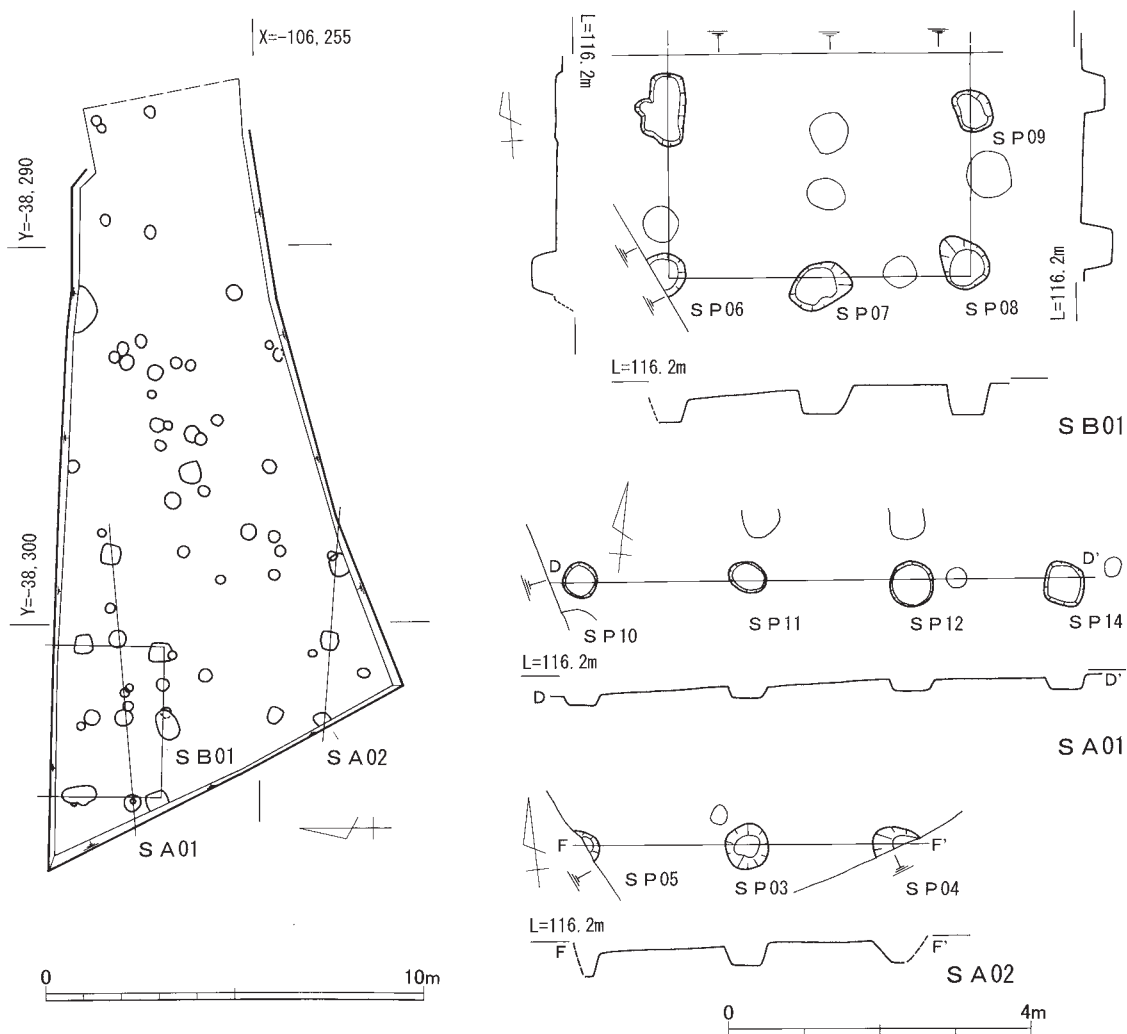


第36図 D7-4地区土坑SK09・10、柱穴SP20実測図

⑧柱穴SP20(第36図右) 溝SD21と切り合い関係にあり、SP20の方が古い。径約50cmの円形の土坑で、丹波型瓦器碗と土師器皿が出土した(第38図20・21)。

⑨柵SA01 下層で検出した。4間分を確認した。柱間は2～2.3mで、方位は東に対して約20°北に振る。柱穴は径40cmの円形で、深さは10cmを測る。複数の柱穴から平安時代の遺物が出土した(第38図22～24)。22は「て」字状口縁の土師器皿、23は緑釉陶器碗、24は黒色土器碗である。

⑩土坑SK07 調査区の中央部南端で検出した方形土坑である。長辺2.5～4.5m、短辺2.5mを



第37図 D7-5地区検出遺構配置図(1/200)および掘立柱建物跡SB01、柵SA01・02実測図

測る。埋土から13世紀中頃の土器が出土した(第38図11~16)。11~14は土師器皿、15・16は丹波型瓦器碗である。

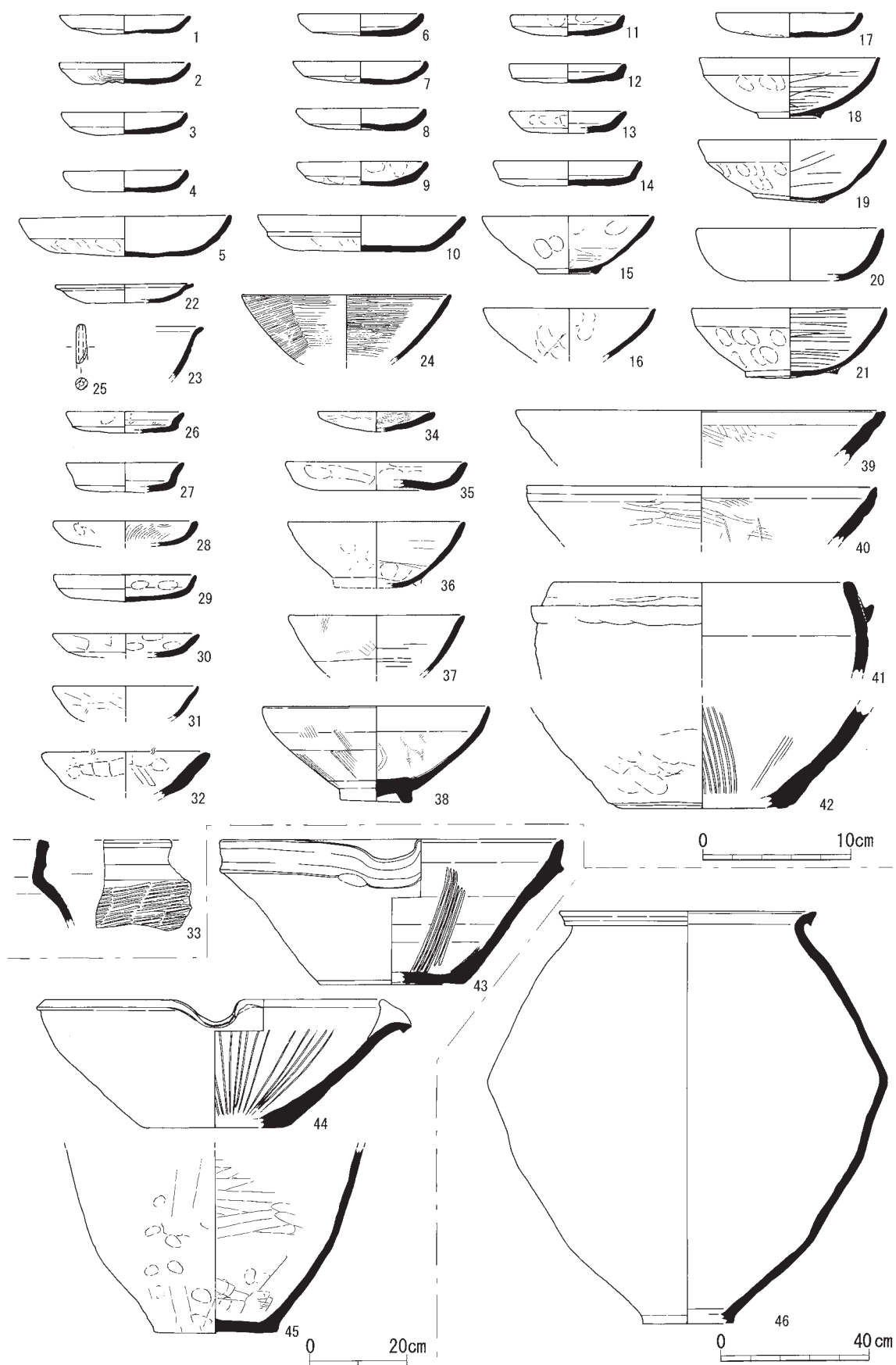
⑪土坑SK23 調査区南西部で検出した不整形な土坑である。埋土には角礫が多く含まれていた。埋土から13世紀の土器が出土した(第38図17~19)。17は土師器皿である。18・19は瓦器碗である。

⑫土坑SK10(第36図中) 柵SA01の南側で検出した。長軸0.4m、短軸0.3m、深さ15cmを測る。15世紀頃の備前焼すり鉢が出土した(第38図43)。7条一単位の櫛描きによるすり目が施される。

⑬柱穴SP15 直径30cm、深さ20cmの円形の柱穴である。丹波焼すり鉢が出土した(第38図44)。内面にはヘラ描きによるすり目が施される。

⑭土坑SX07 調査地北部西よりで検出した一辺2.5mの隅丸方形の土坑である。土坑内には拳大から人頭大の石が多量に詰まっており、丹波焼甕が出土した(第38図46)。

(黒坪一樹・松尾史子)



第38図 D7地区出土遺物実測図(1)

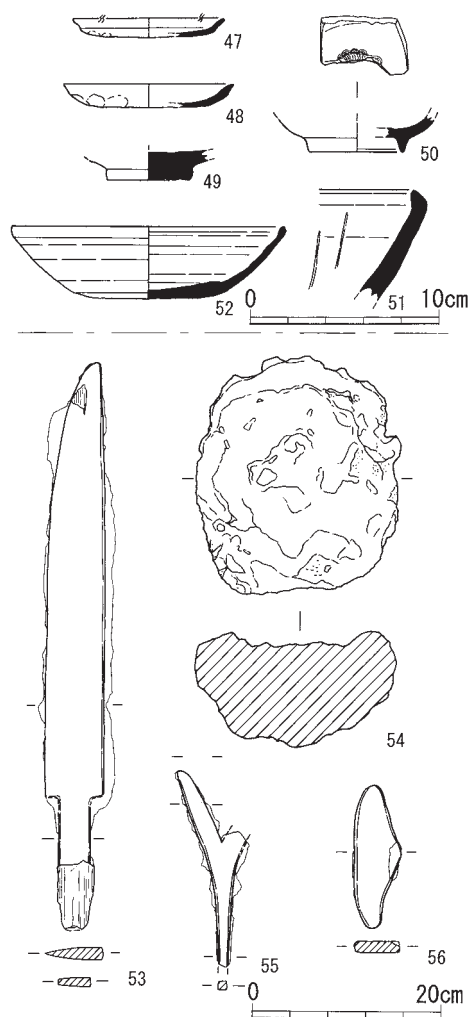
(5) D7-5地区の遺構・遺物

D7-4地区の西側に設定した調査区である。上層と下層の2面の調査を行い、下層で多数の柱穴を確認した。柱穴の規模・形状などからほとんどが上層で確認できなかった中世の遺構であると考えられるが、次に報告する遺構は、中世より古い可能性がある。

①掘立柱建物跡S B01(第37図右上) 下層で検出した桁行1間以上(2.8m以上)、梁行2間(約4m)の建物である。建物の方位は北に対して約2°東に振る。柱間は7尺等間である。柱穴はおおむね50~60cmの不整形な円形で、深さは30~40cmを測る。出土遺物はない。

②柵S A01(第37図右中) 下層で検出した東西方向の柵である。3間分を確認した。柱間は不揃いである。柱穴は径40~50cmの不整形な円形もしくは隅丸方形で、深さは20cm前後である。柵の方位は東に対して約15°北に振る。S B01と前後関係にあるが、重複関係がなく、遺物も出土していないため、新旧関係および時期は不明である。

③柵S A02(第37図右下) 下層で検出した東西方向の柵である。2間分を確認した。柱間は7尺等間である。柱穴は一辺約50cmの隅丸方形で、深さは30cm前後を測る。柵の方位は東に対して約15°南に振る。柱間と埋土が掘立柱建物跡S B01と同じであることから同時期に存在した可能性がある。



第39図 D7地区出土遺物実測図(2)

(松尾史子)

11. 100～105・107・119トレンチの調査

(1) 100～105トレンチの遺構・遺物

D7-2～5地区の北側に設定した用水路部分のトレンチである。土坑数基と多数の柱穴を検出した。これらの遺構の時期は、出土遺物から概ね12世紀から14世紀と考えられる。

①土坑SK39 調査区西部で確認した不整形な土坑である。土師器や瓦器が出土した(第43図9～18)。9～16は土師器皿で、都の土器を模倣して口縁部をナデによって仕上げる。17・18は瓦器碗である。12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。

②柱穴SP47(第42図左中) 直径30cmの円形の柱穴である。土師器皿がまとまって出土した(第43図1～8)。いずれも円盤状の粘土塊を手の平上で成形し、内面のみをナデで仕上げる。亀岡盆地で一般的にみられるタイプで、14世紀後半頃のものと考えられる。

③柱穴SP49 直径30cmの円形の柱穴である。出土した土師器皿(第43図19・20)は、いずれも口縁端部のみをナデ、体部には指の痕が明瞭に残る。

(2) 107トレンチの遺構・遺物

105トレンチの北側に設定した用水路部分のトレンチである。土坑2基のほか多数の柱穴を確認した。柱穴は概ね直径20～30cm前後を測る。遺構の時期は出土遺物から概ね12世紀から13世紀頃と考えられる。

①土坑SK02(第42図左上) 調査区北部で検出した。長径2.8m、短径1.5mを測る楕円形の土坑である。土坑の中央部で土師器皿がまとまって出土した(第43図21～26)。いずれも口縁部に二段ナデを施す。

②柱穴SP04 直径20cmの円形の柱穴である。13世紀の土師器小皿が出土した(第43図27)。

③柱穴SP03(第42図右上) 調査区西部で検出した。直径30cm、深さ約20cmの柱穴である。瓦器碗と瓦が出土した(第43図28・59)。

④包含層出土遺物(第43図49～58) 51～56は奈良時代後半から平安時代にかけての須恵器、49・50は白磁碗、57は土錘、58は瓦質土器羽釜である。

(3) 119トレンチの遺構・遺物

D7-5地区の西側に隣接する用水路部分のトレンチである。中世墓1基、溝1条のほか多数の柱穴を確認した。遺構の時期は、出土遺物から概ね13世紀から14世紀である。

①土坑SK19 第43図29・30は内面のみをナデで仕上げる土師器皿である。

②柱穴SP67 径40cm、深さ30cmの楕円形の柱穴である。土師器皿(第43図32・33)や丹波型瓦器碗(第43図34)が出土した。

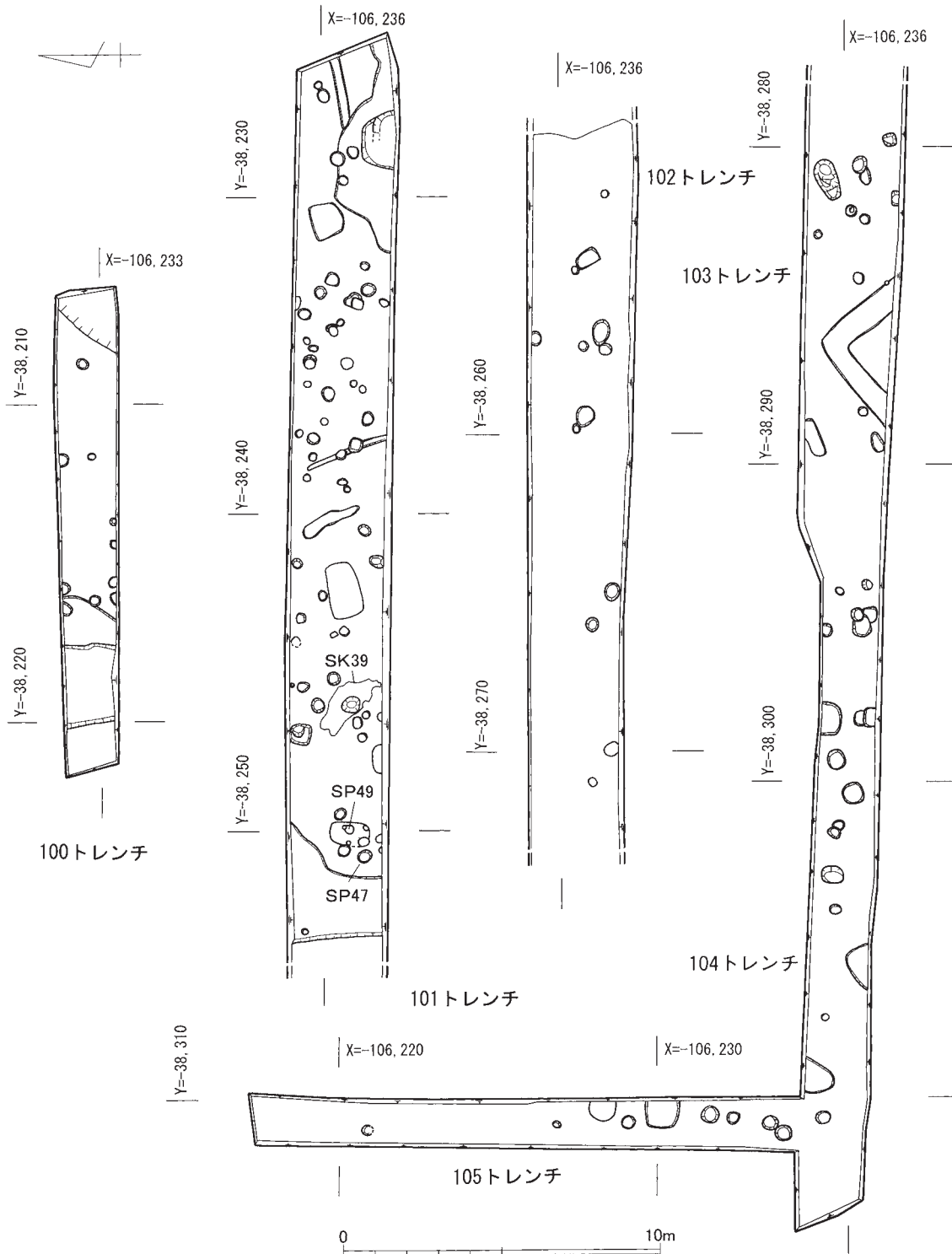
③土坑SK15(第42図左下) 径50cm、深さ15cm前後の不正円形の土坑である。土師器皿もしくは杯が出土した(第43図35・36)。35はSP49出土資料と同じく口縁端部のみをナデる。

④土坑SK37 第43図37は土師器皿、第43図38は瓦器碗、第43図39は瓦質土器羽釜である。

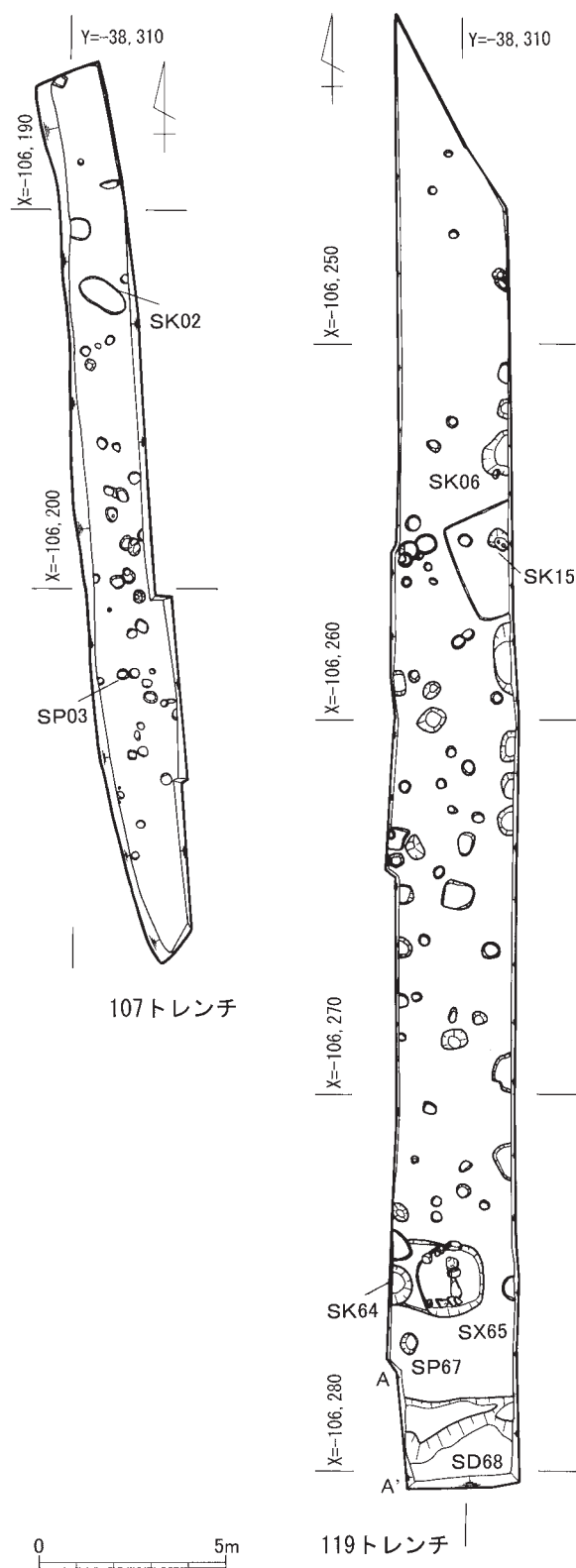
⑤土坑SK06 径1.1m、深さ10cmの半円形の土坑である。101トレンチの土坑SK47と同じタイプの土師器皿(第43図40～42)と青磁碗(第43図44)が出土した。青磁碗は釉が分厚く、見込み

に草花の印花文が施される。これらは14世紀後半頃と考えられる。ほかに瓦質土器すり鉢が出土した(第43図45)。底部付近ですり目が格子状となる独特のものである。時期は15世紀以降に下ると考えられる。

⑥中世墓S X65(第42図右中) 一辺約2m、深さ約10cmの隅丸方形の土坑である。土坑底部



第40図 100～105トレンチ検出遺構配置図(1/200)



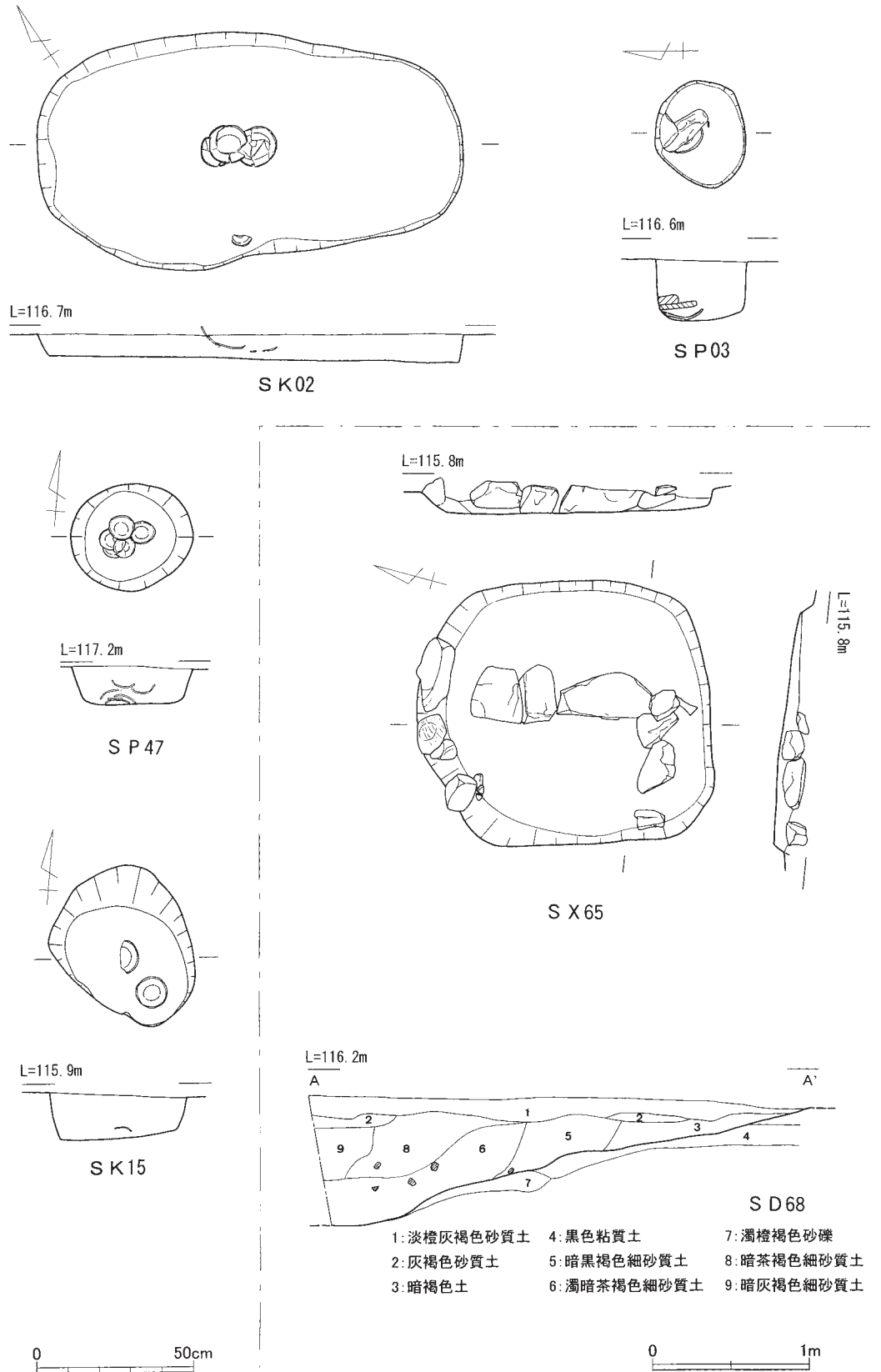
第41図 107・119トレンチ検出遺構配置図 (1/200)

には「L」字状に並べた石列が1段分あり、墓の可能性はある。遺物は少量出土した(第43図47・48)。47は土師器皿、48は瓦器碗である。

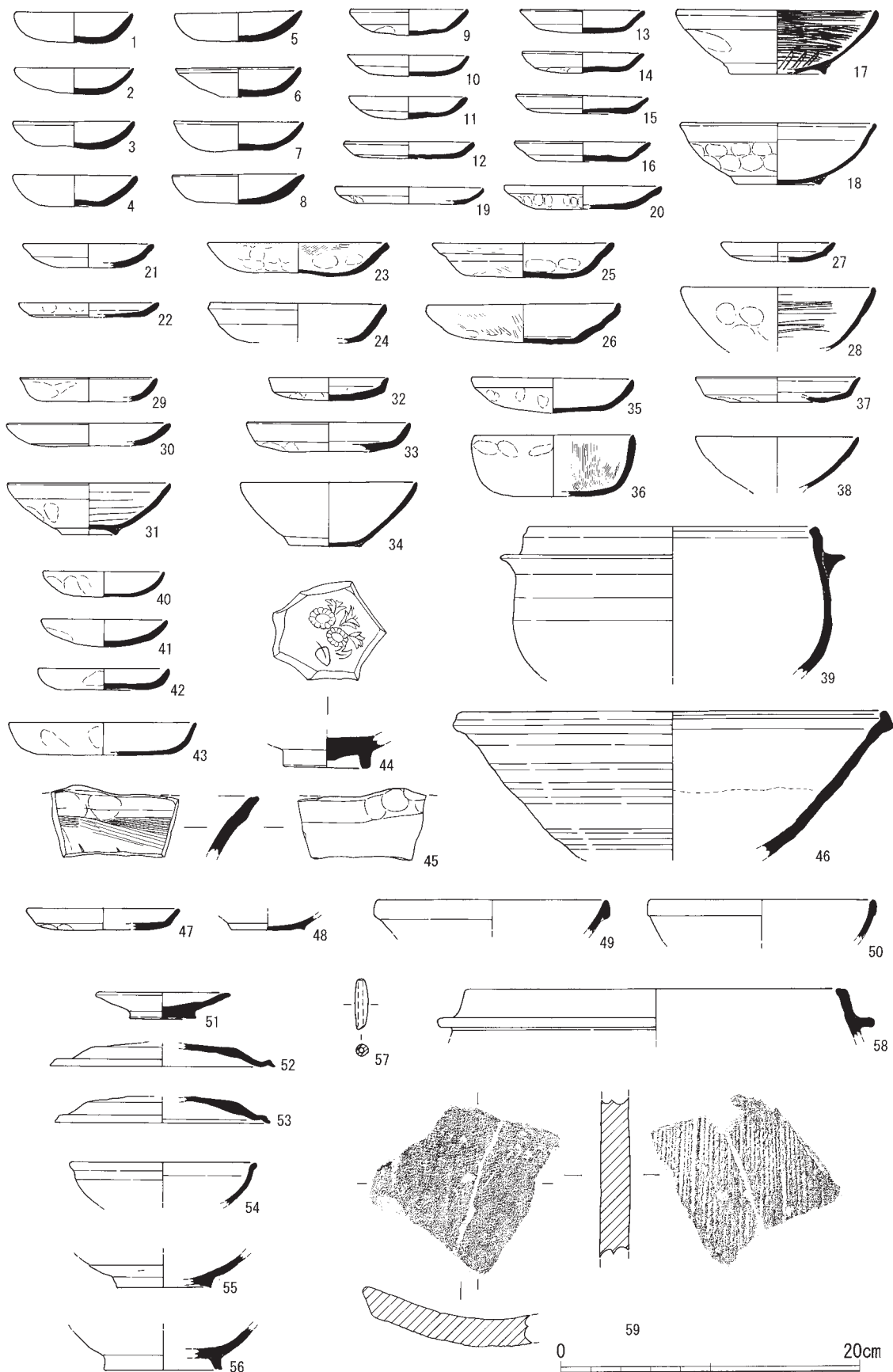
⑦土坑SK64 調査地南西部で検出した。径90cm、深さ30cmを測る。東播系須恵器鉢が出土した(第43図46)。内面見込み部分は、かなり使い込んでいたらしく磨滅が著しい。

⑧溝SD68 調査地の南端で検出した。北から南に向かって落ち込み状を呈するが、埋土の堆積状況から溝と考える。検出長3m、幅2m、深さ80cmを測る。

(松尾史子)



第42図 柱穴S P 03・47、土坑S K 02・15、
中世墓S X 65 実測図および溝S D 68 土層断面図



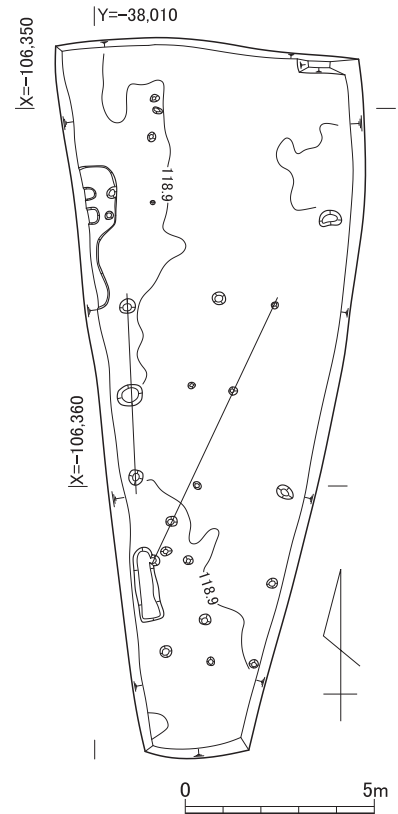
第43図 100～105・107・119 トレンチ出土遺物実測図

12. A2地区の調査

A地区で最も北に設定した調査区で、柱穴を20基以上を検出した。柱穴群は第44図に示したように、柵状に並ぶものが見られるものの、掘立柱建物として復原できるようなものはみられなかった。

これらの柱穴からは、瓦器や土師器などの土器片がごく少量出土した。柱穴の時期は出土遺物から中世と思われるが、詳細は不明である。

(筒井崇史)



第44図 A2地区検出遺構配置図

13. A3地区の調査

A2地区の南西側に設定した調査区である。弥生時代、飛鳥・奈良時代、中世の各時期の遺構・遺物を検出した。調査区は南西に向かって傾斜しており、西側では黒褐色粘質土(黒ボク層)が厚く堆積していた。中世の遺構はこの上面で検出した(第46図)。

(1) 弥生時代の遺構・遺物

明らかに弥生時代の遺構と判断できるのは柱穴SP302のみであるが、遺物の出土しなかった柱穴も多数あることから、弥生時代に属する柱穴も存在すると思われる。ただし、竪穴式住居跡や土坑などの遺構は検出されなかった。

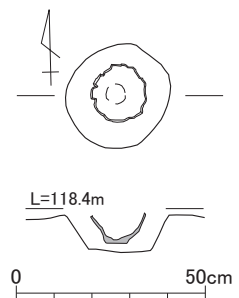
①柱穴SP302(第45図) 調査区南部のほぼ中央で検出した。直径28cm、深さ10cmを測る。弥生土器の甕の底部の破片(第53図1)が柱穴内に据え置かれたような状況で出土した。1は平底の底部で、外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。詳細は不明であるが、弥生時代中期の甕と考えられる。

(2) 飛鳥・奈良時代の遺構・遺物

飛鳥・奈良時代の遺構としては、竪穴式住居跡5基のほか、土坑、柱穴、溝などを多数検出した。竪穴式住居跡は出土した遺物からいずれも飛鳥時代のものである。柱穴も多数検出したが、掘立柱建物や柵としてまとまるものは確認できなかった。

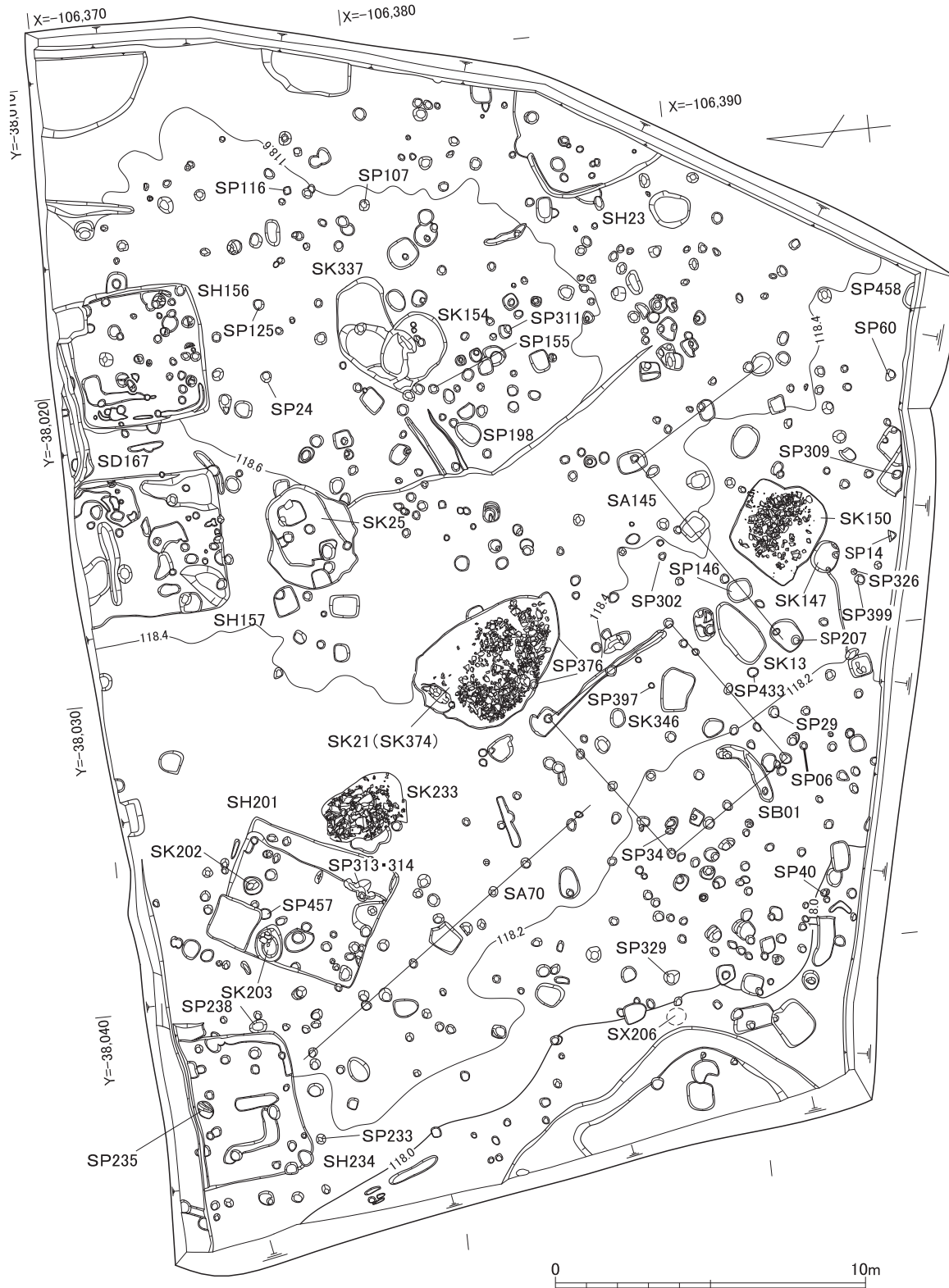
①竪穴式住居跡SH23(第47図左上) 調査区の東辺中央付近で検出した。住居跡の南東側約1/2は農道の下に延びる。平面形は隅丸方形で、北辺検出長3.5m、西辺検出長4.0m、深さ15cmを測る。北辺の中央にカマドを設けている。主柱穴は北辺に沿って2基検出した。北辺から西辺にかけて部分的に周壁溝を検出した。住居の方位は北に対して約17°西に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある(第53図2～5)。2は須恵器高杯の脚部で、3方に長方形のスカシがある。3は須恵器壺の口縁部である。

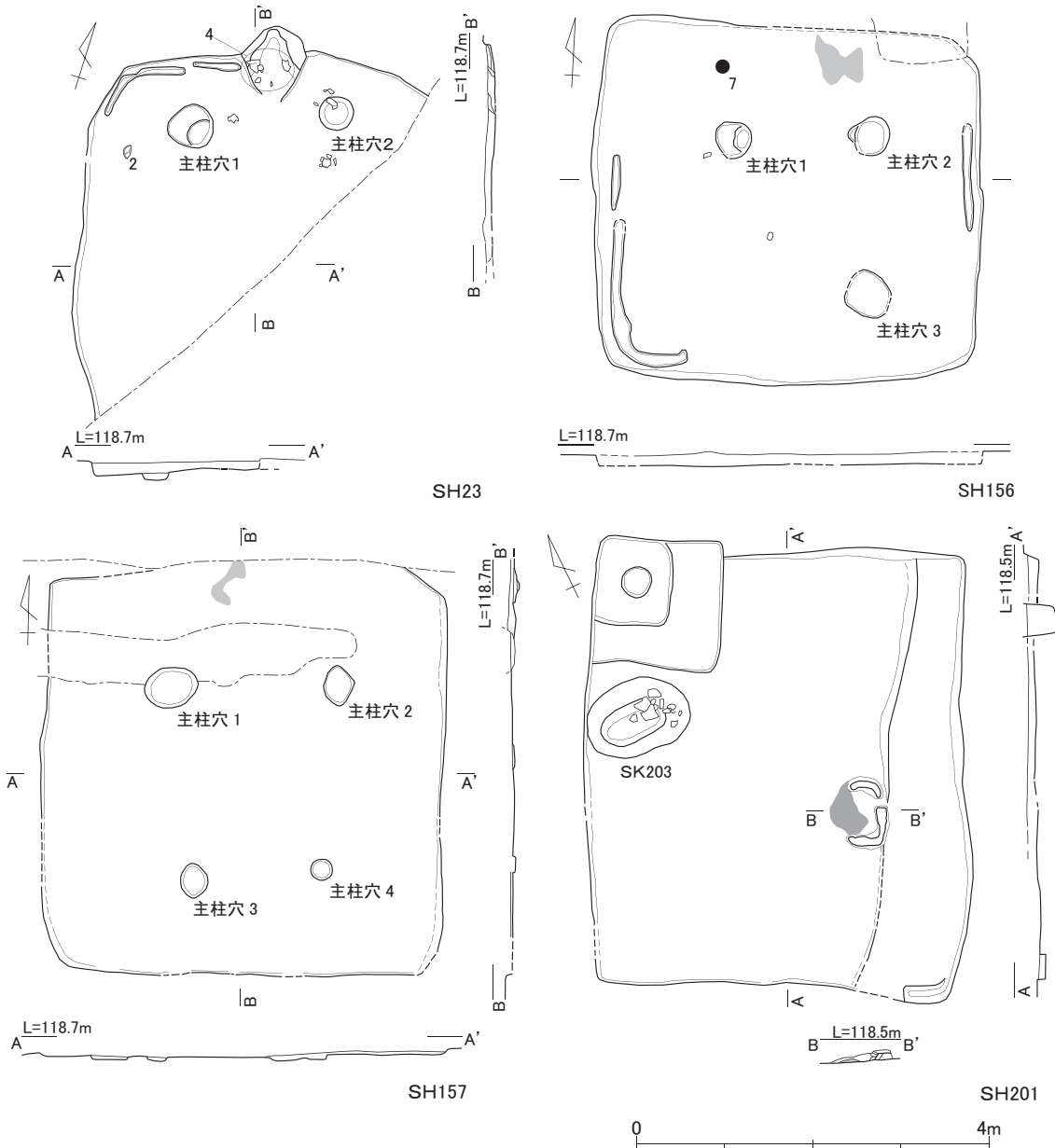


第45図 柱穴
SP302実測図

4は土師器甕である。やや内湾気味の口縁部を有する。5は土師器杯である。内面に暗文を有する。
 5はいわゆる畿内産土師器^(注4)の模倣品と考えられ、飛鳥時代中頃から後半に位置づけられる。類似した器形のものが昨年度報告した国分45号墳の石室内から出土している。^(注5)



第46図 A3地区検出遺構配置図(1/200)

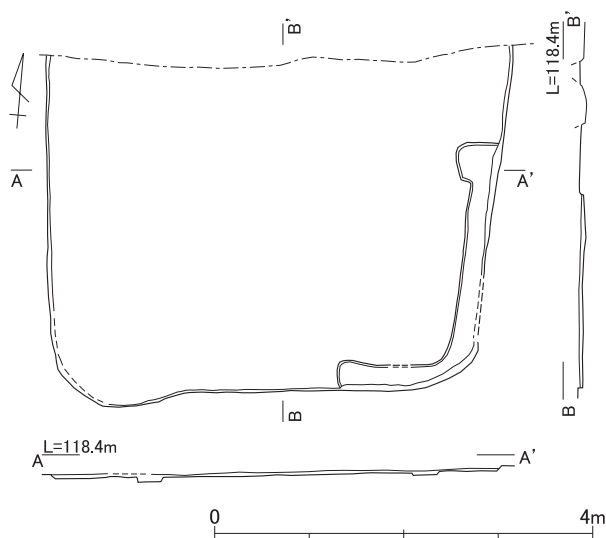


第47図 竪穴式住居跡SH23・156・157・201実測図

②竪穴式住居跡SH156(第47図右上) 調査区の北辺東寄りで検出した。竪穴式住居跡SH157と東西に並んで検出した。平面形は方形で、住居の方位はおおむね南北方向である。北辺長4.1m、西辺長4m、深さ10cmを測る。東辺と西辺から南辺にかけての周壁溝を確認した。主柱穴は3基検出したが、南西部については不明である。主柱穴は、直径40～50cm、深さ15～30cmを測る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある(第53図6～8)。6は内面にかえりを有する須恵器杯B蓋である。飛鳥時代後半のもので、住居の時期を示すと考ええる。7は土師器杯Cである。内面に暗文を施す。8は土師器鍋の口縁部である。7は畿内産土師器と考えられるが、6よりも古く、飛鳥時代前半から中頃のものと考えられる。

③竪穴式住居跡SH157(第47図左下) 調査区の北辺で検出した。竪穴式住居跡SH156の西



第48図 竪穴式住居跡S H 234 実測図

側に位置する。平面形は方形で、北辺長は4.5m、西辺長は4.3mを測る。深さは非常に浅く5cm程度である。住居の方位はおおむねS H 156に一致する。北辺の一部はトレンチ壁と重複するため検出できていない。主柱穴は4基である。直径20～50cm、深さ5～12cmを測る。

出土遺物として須恵器などがある(第53図9・10)。9は6と同様の須恵器杯B蓋である。10は須恵器長頸壺の体部以下である。高台がやや長く古い様相を示す。9・10はほぼ同時期のものと考えられ、飛鳥時代後半に位置づけられる。

④竪穴式住居跡S H 201(第47図右下) 調査区の北西部で検出した。平面形は方形で、北東辺4.2m、北西辺4.8m、深さ15cm前後を測る。住居の方位は北に対して約26°東に振る。南東辺にカマドを設置している。周壁溝や主柱穴は確認できなかった。

出土遺物としては須恵器や土師器などがある(第53図11～15)。11は土師器鍋である。12・13は須恵器杯H蓋である。13はカマドから出土したもので、住居跡の時期を示すと考える。14は須恵器杯G蓋の破片である。15は須恵器杯Gである。12～15は同時期に存在してもよく、飛鳥時代中頃に位置づけられる。このほか後世の混入品として、中世の土師器や古瀬戸などがある(第54図95～97)。95・96は土師器皿である。96は口縁端部が外折するタイプである。97は古瀬戸袴越腰香炉である。口縁部内面から腰部外面にかけて、緑を帯びた灰釉が掛けられる。

⑤竪穴式住居跡S H 234(第48図) 調査区の北西隅で検出した。平面形は方形で、西辺長3.6m以上、南辺長4.5m、深さ3～5cmを測る。住居の方位はおおむね南北方向である。北辺は調査区外に延びる。住居は、ほとんど削平されていて、かろうじて輪郭が確認できたのみである。東辺から南辺にかけて幅25～30cm、深さ5cm程度の周壁溝を検出した。主柱穴は確認できなかった。時期の決め手となる出土遺物はないが、竪穴式住居跡S H 156・157とほぼ同じ方位であることから、飛鳥時代後半の住居である可能性が高い。

⑥土坑S K 346 調査区の中央部、やや南寄りで検出した。平面形は不整形な方形である。出土遺物としては奈良時代前半の須恵器杯B蓋がある(第53図16)。

⑦土坑S K 337 調査区の北東部で検出した。平面形は不整形な形状である。出土遺物としては飛鳥時代中頃の須恵器杯G蓋がある(第53図17)。

⑧土坑S K 147 調査区の南東部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸1m、短軸0.8m、深さ20cm前後を測る。出土遺物として大型の須恵器杯がある(第53図21)。

⑨柱穴S P 329 調査区の南西部で検出した。平面形は円形で、直径45cm、深さ25cmを測る。

柱穴内から須恵器杯Aが出土した(第53図19)。19の底部外面には墨痕が認められたが、文字は判別できなかった。

⑩柱穴S P 417 調査区の北西部で検出した。土師器甕が出土した(第53図20)。

⑪溝S D 167 調査区の北辺、東寄りで検出した東西方向の溝である。検出長4.3m、幅0.4m、深さ10～20cmを測る。竪穴式住居跡S H 156と重複しており、これらより新しい。出土遺物として土師器杯C、高杯杯部破片などがある(第53図22・23)。いずれも内面に暗文を施す。

⑫不明遺構S X 206 調査区の西辺寄りで検出した。遺構としての平面形は確認できなかったが、須恵器甕が出土した地点である。出土遺物としては須恵器甕のほか、杯B・鉢Eなどがある(第53図24～26)。

(伊野近富・筒井崇史)

(3)中世の遺構・遺物

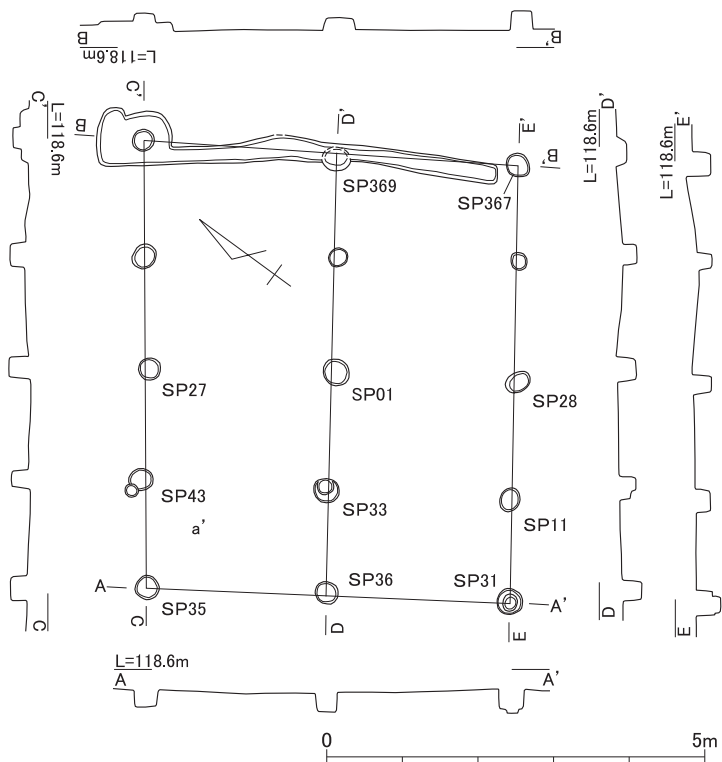
中世の遺構として土坑や柱穴を多数検出した。これらは調査地全体に点在しており、北西から南東にかけて建物群が構成されていたと考えられる。その一部が建物として復原できた。

①掘立柱建物跡S B 01(第49図) 調査区の南部で検出した。桁行4間(約5.9m)、梁行2間(約4.9m)の総柱の建物である。建物の方位は北に対して32°ないし36°西に振る。柱穴はいずれも直径20cm程度、深さ20cm程度である。埋土は灰褐色や暗褐色である。出土遺物としては瓦器や土師器がある(第54図27～29)。27・29は土師器皿である。29は立ち上がり部が強い指押さえて凹凸が激しい。28は丹波型瓦器椀である。焼成不良で断面が灰黒色を呈する。27・28は柱穴S P 01から、29は柱穴S P 33から出土した。

②柵S A 70 調査地の北西部で検出した。柵の方位は北に対して約36°西に振る。柱穴は6基で、直径30～40cmである。

③柵S A 145 調査地の南東部で検出した。「L」字状に屈折する。柵の方位は北に対して約33°西に振る。柱穴は6基検出した。柱穴の平面形は隅丸方形で、長辺1.2m、短辺0.8mである。

④土坑S K 21(第50図) 調査地の中央部で検出した。平面形は不整形な楕円状を呈し、北西から南東方向に主軸を持つ。長軸5.5m、短軸3.5mである。底面には20～50cm大の自然石が置かれていた。

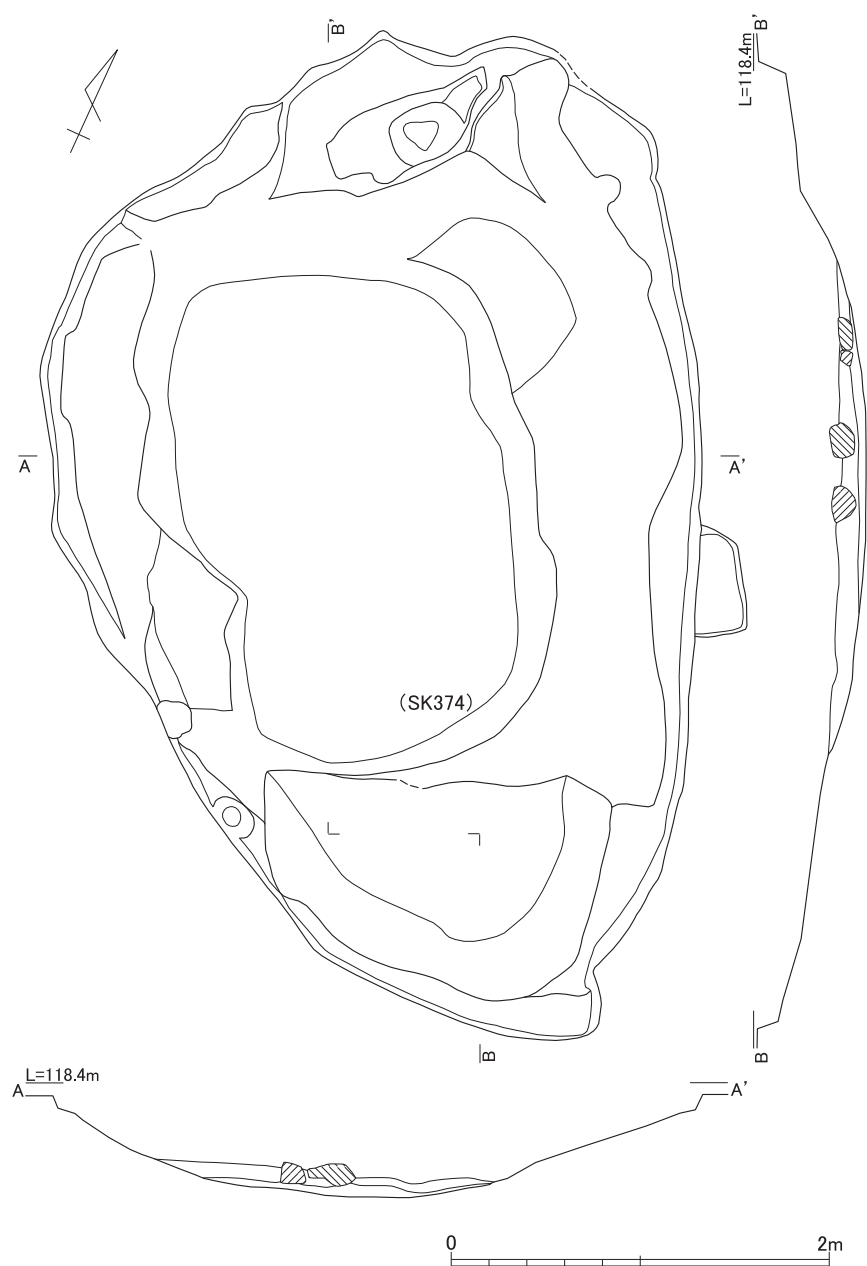


第49図 掘立柱建物跡S B 01 実測図

出土遺物としては土師器や瓦質土器、輸入陶磁器などがある(第54図90～94)。90・91は土師器皿である。90は口縁部のヨコナデが施されない。92は瓦質土器羽釜である。口縁部外面に3条の沈線によって、段が形成されている。2次的に被熱したためか、大半が赤橙色を呈する。胴部外面はヘラケズリ、内面はハケ調整が施される。93・94は白磁皿である。93は体部下半以下が露胎であるが、94は畳付以外は全面施釉である。内面に重ね焼きの痕跡が認められる。

⑤土坑S K 150(第51図上) 調査地の南部で検出した。平面形はやや不整形な隅丸方形である。南西辺長2.8m、北西辺長2.5m、深さ約20cmを測る。拳大から一辺30cm程度の角礫が土坑内から集中して出土したが、乱雑に投棄されたような状態であった。

出土遺物としては瓦器や瓦質土器、須恵器などがある(第54図85～89)。85・86は丹波型瓦器碗



第50図 土坑S K 21 実測図

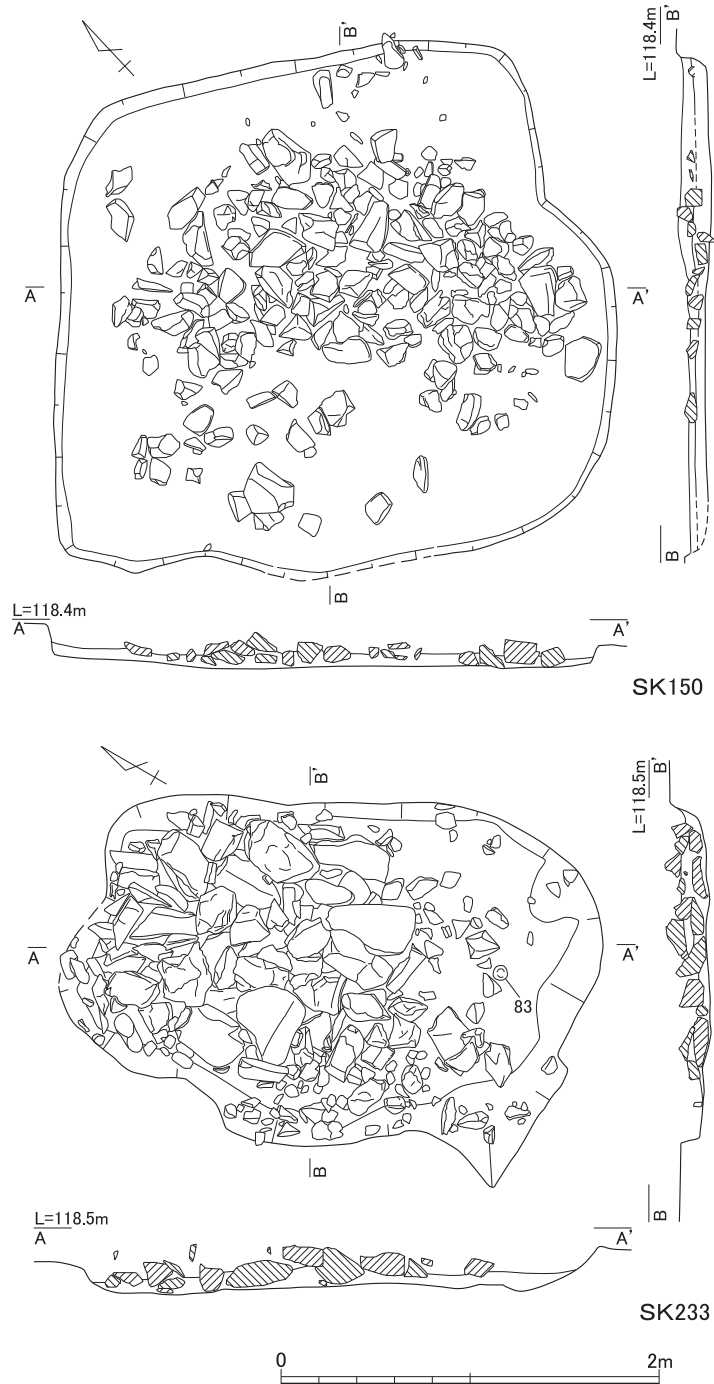
である。86は内面にやや粗い圏線ミガキが施され、外面にもわずかにヘラミガキが施される。2次的に被熱したためか、器面の下半が灰橙色～淡灰色を呈する。87は瓦質土器羽釜である。88は東播系須恵器鉢である。外面に重ね焼きの痕跡がみられる。89は備前焼すり鉢である。7条一単位のすり目が施される。色調は暗灰色を呈するが、破断面はやや紫色を帯びる。

⑥土坑 S K 233 (第51図下) 調査区の北西部で検出した。平面形は不整形であるが、北西から南東方向に主軸を持つ、隅丸長形状を呈する。長軸2.9m、短軸1.8mである。底面に20～40cm大の石が置かれていた。性格は不明である。出土遺物として土師器皿がある(第54図83)。83は口縁部外面は端部まで指掌痕がみられる。ほぼ完形である。

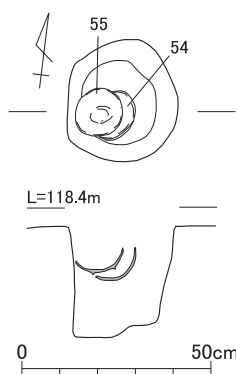
⑦土坑 S K 203 調査区の北西部、竪穴式住居跡 S H 201の上面で検出した。平面形は楕円形で、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ約40cmを測る。出土遺物としては飛鳥時代後半の土師器杯 C (第53図18)と中世の土師器皿がある(第54図71・72)。18は内面に暗文を施す。71・72は断面が灰黒色を呈し、器表面は灰橙色～淡灰色を呈する。

⑧土坑 S K 202 土坑 S K 203と同様に、竪穴式住居跡 S H 201の上面で検出した。土師器皿が出土した(第54図73・74)。

⑨土坑 S K 13 調査区の南半部、中央付近で検出した。土師器や瓦器が出土した(第54図75～78)。75・76は土師器皿である。75は口縁端部をわずかに内側に折り曲げる。77・78は丹波型瓦器碗である。77は内面に粗い圏線ミガキが施される。78は内面にやや密な圏線ミガキが、外面に



第51図 土坑 S K 150・233 実測図



第52図 柱穴
S P 06 実測図

粗いヘラミガキが施される。

⑩土坑 S K 377 調査区の中央、北東寄りで検出した。黒色土器 B 類碗が出土した(第54図79)。内面に密な圈線ミガキが施され、口縁内端部に沈線がめぐらされる。外面はヘラケズリの後、密なヘラミガキが施される。

⑪土坑 S K 374(第50図) 土坑 S K 21の下部にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺3.0m、短辺2.0mを測る。丹波型瓦器碗が出土した(第54図80)。炭素が吸着しておらず、淡橙灰色を呈する。

⑫土坑 S K 25 調査区の北半部、中央付近で検出した。土師器皿が出土した(第54図82)。口縁部が緩やかに立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。

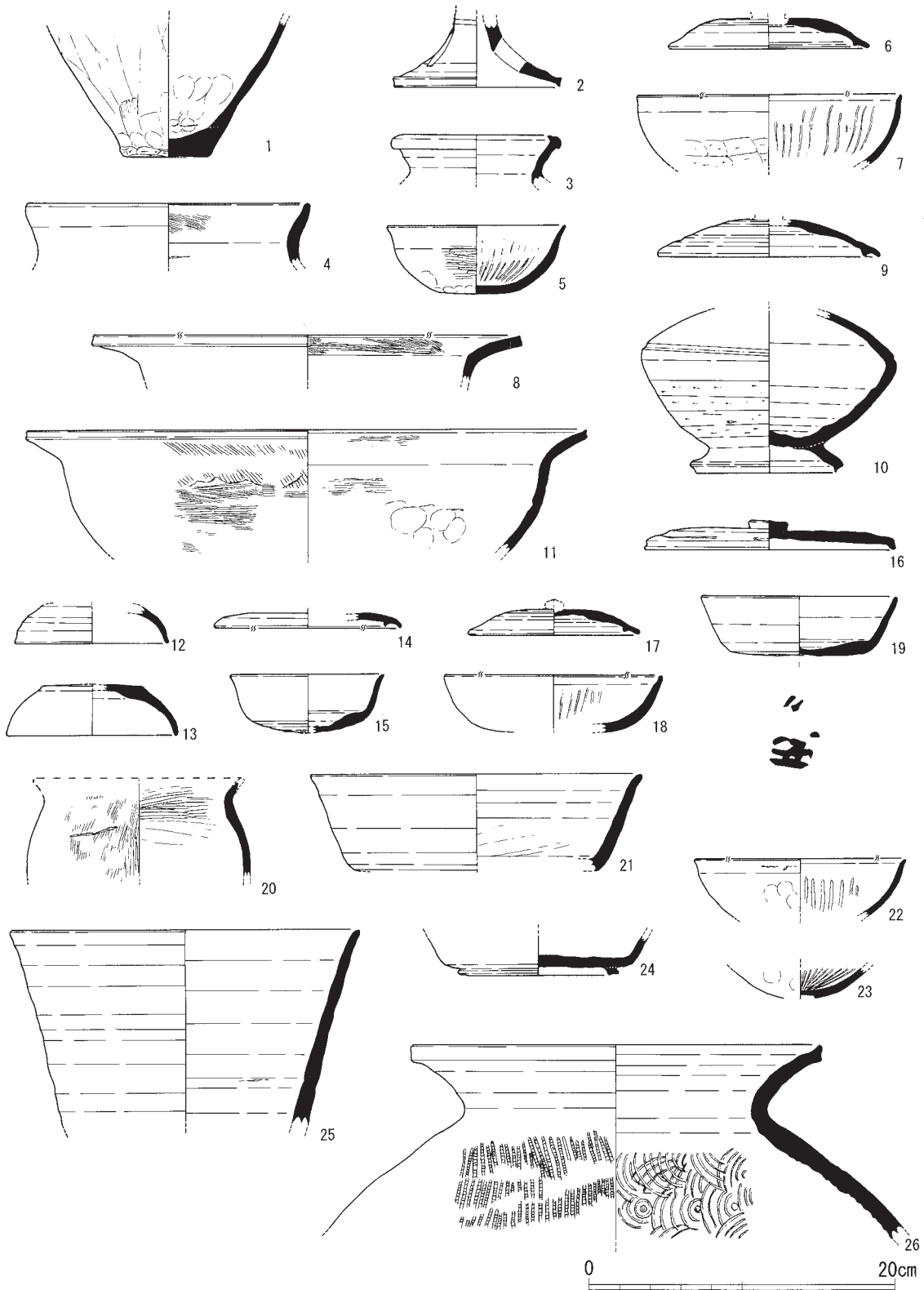
⑬土坑 S K 154 調査区の東半部、中央付近で検出した。無釉陶器碗が出土した(第54図84)。平高台で内外面にヘラミガキが施される。

⑭柱穴 S P 24 調査区の北東部で検出した。土師器皿が出土した(第54図81)。口縁端部がわずかに外反する。

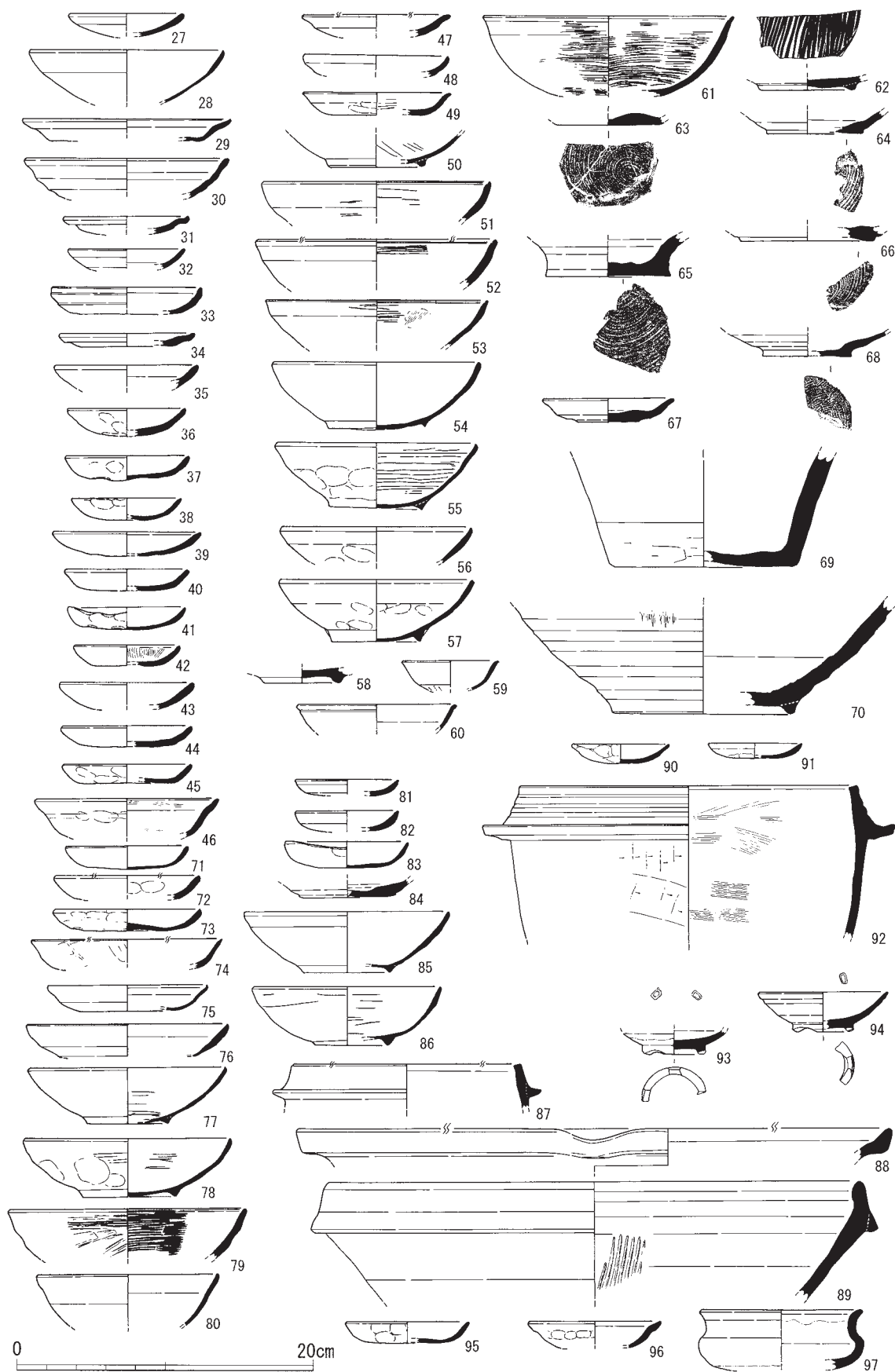
⑮柱穴群 A 3 地区では多数の柱穴を検出したが、建物や柵としてまとまるものは上記のものを除いて、確認することはできなかった。柱穴はおおむね平面形が円形で、直径30～50cm、深さ10～30cmのことが多い。

出土遺物としては土師器や瓦器、黒色土器、須恵器などがある(第54図30～70)。30～48は土師器皿である。30は3段のヨコナデが施される。31・34は「て」字状口縁であるが、34は退化している。33は2段ナデで、口縁端部が直立するものである。37・38・41・42・44は口縁部のヨコナデが施されない。49は瓦器皿である。口縁部内面に圈線ミガキが施される。50～58は丹波型瓦器碗である。51～53は口縁内端部に沈線がめぐらされる。59は瓦器小碗である。60は緑釉陶器碗である。61・62は黒色土器 B 類碗である。63～66は回転台土師器杯、67は回転台土師器皿である。底部に回転糸切り痕がみられる。68は須恵器碗である。69は須恵器壺である。体部外面の底部付近は横方向のヘラケズリが施される。瓦質に近い焼成である。70は東海系陶器鉢である。内面はアバタ状に剝離している。30～32は S P 14から、33は S P 309から、34・35は S P 198から、36・37は S P 238から、38・39は S P 235から、40・64は S P 34から、41・42は S P 125から、43は S P 29から、44は S P 313から、45は S P 457から、46は S P 314から、47～51は S P 326から、52は S P 146から、53は S P 40から、54・55は S P 06から(第52図)、56は S P 397から、57は S P 376から、58は S P 433から、59は S P 434から、60は S P 311から、61は S P 458から、62は S P 223から、63は S P 116から、65は S P 20から、66・68は S P 155から、67は S P 399から、69は S P 60から、70は S P 107から出土した。

(森島康雄)



第53図 A3地区出土遺物実測図(1)



第54図 A3地区出土遺物実測図(2)

京都府遺跡調査報告集 第134冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 中西印刷株式会社
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel (075)441-3155(代) Fax (075)417-2050